
IS(インフィニット・ストラトス)～魔神がいく物語～

紅 幽鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 魔神がいく物語

【Nコード】

N2785Y

【作者名】

紅 幽鹿

【あらすじ】

みなさん知っていますか？【魔神】という一族を…彼らは、悪魔と神の血を受け継ぐ一族…その力は世界を滅ぼすほどの力を持っている…

その一族の一人である。博麗幸夜は自分の両親にある依頼を受けて、相棒の鳴海悠二と一緒にISの世界に訪れる…

さてさて、彼らがもたらすのは、終焉か…それとも…

この作品は色々と設定を詰め込む場合があると思います。それが嫌
だという人は回れ右をしてください。

零話〜プロローグ〜（前書き）

これは、魔法少女リリカルなのは〜クリムゾンデビルゴット〜のキャラクター達が出ます。

これからよろしくお願いします。

零話、プロローグ

♪♪♪

暗い研究室の様な所で、機械音が辺りに鳴り響く。

そして、研究所の様な所の奥にいます、独特なうさ耳をつけ、【不思議の国のアリス】のアリスが着ているような服を着ている女性が、空中に浮いているディスプレイを見ていた。

そして、ディスプレイを見ている女性の後ろから二人の男性？がこちらに向かってきた。

一人は、長身で目の色が右が金、左が翠と片方ずつ違っており。濁った金色の髪をポニーテールにして、真っ黒と云っていいほどの色をしたコートの様なものを纏っている。

もう一人は、これまた長身で目の色が金色で、銀髪を肩にかかるぐらいの長さで切り揃えており、白いスーツを着ている。

「篠ノ之、僕たちを呼び出してどうしたんだ？」

「そうだぞ束。俺たちに用っていた言い何なんだ？」

二人がそれぞれ口を開く。二人の言葉が苗字と名前を言っているのなら、この女性の名前は篠ノ之束しののへと言っらしい。

「やあやあ コウ君にユウ君。君たちにはIS学園に行ってもらい

まゝす♪ブイブイ♪」

「「はあ?」」

この束の言葉に二人は一瞬固まり、そして…

「よし、そこに直れ人間ヒューマンどうやら貴様の脳は壊れたようだな。安心しろ僕が一旦解体して直してやる。」

黒いコートをまとった男が、いつの間にか出したナイフを束に向かって突きつける。

「ちよつと待て幸夜!! 落ち着け! 落ち着くんだあああああ!!
!!!」

それを見たスーツを着た男がナイフを振り回す男…幸夜を止める。
そして、ナイフを持った幸夜はスーツを着た男性に止められたこと
によって、ナイフを仕舞う。

「悠二…僕はもう【幻想郷】に帰りたい。」

「…俺もだよ。」

二人が思い出すのは、この【世界】に来る前にした。幸夜の両親とのやり取りである。

「それで、如何して俺たちをIS学園に入れようとするんだ?」

スーツを着た男…悠二が束に聞くが…

「悠二、それは簡単だろ？こいつのことだ、自分の妹である【篠ノ之箒^{しのゆめ}】を守ってほしいとか言うんだろ？」

幸夜は束を見ながら言う。束は一瞬驚いた顔になるが…

「さすが、コウ君、分かってたか…もう一度二人にお願いするね。IS学園に行つて箒ちゃんを守つてあげて。」

束は先ほどとは違い真剣な声色で二人に言う。その束を見た二人は…

「了解した、篠ノ之。」

「その願い俺たちが叶えてやるよ。」

二人は笑いながら言った。

…この時は誰も思わなかっただろう。このやり取りから、この【世界】の物語が始まったということ………

オリ主設定（ネタばれ注意）（前書き）

今回は幸夜だけの設定です。

次は悠二とISの設定を書いて、本編に行きたいと思います

オリ主設定（ネタバレ注意）

名前：博麗幸夜 / 零崎紅識
はくれい こうや むろやまこうしき

二つ名：冷血の皇帝、魔術師殺し、絶対女帝、鮮血の執事、天使喰
クルエル・エンペラター マーダー アブソリュート・エンプレス フレッシュアップ ゼルバト ギター
デビルズ・イーター フリースク・イーター オバーキルバレード
い、悪魔喰い、化物喰い、世界殺し、人外最悪、大量殺戮祭、青騎
士、詐欺師、博麗の夫

種族：魔神

年齢：1000歳以上（外見年齢は16歳）

好きなもの / 得意な事：食べる、料理、人形作り、人間、子供、家族、霊夢、仲間、甘い物、煙草、酒、冷たい物、射撃

嫌いなもの / 苦手な事：人間、自分は正義だという人間、子供を人体実験の材料にするやつ

容姿：顔はFateのセイバーオルターの瞳を金と翠のオッドアイで、髪は銀と黒のリボンで結んでポニーテールにしている。身長は180?と長身だが、何故か顔とのバランスがとれているように見える。服装は牙狼に出てくる、冴島鋼牙が着ていた服を漆黒に染めたもの。

幸夜は幻想郷にいる博霊霊夢と結婚しており子供が二人おり、3人を溺愛している。

彼は、神、悪魔、妖怪の血が流れている。

人間をもっとも醜い種族で、もっとも愛すべき種族だと考えている。普段は、温厚で優しくそうだが、彼が本気でキレれば、あたりに濃い殺気が充満し、それと同時に血の匂いも出てくるほどやばい何かになる。彼はこれを「【零崎化】、ただのしょうもない【殺人鬼】になるだけ」と言っている。そして、零崎化すると、彼の二つ名と同じである大剣『オーバーキルバレード大量殺戮祭』うを使い、首を跳ね飛ばす。

それと、色々な世界を回ってきているため。たくさんの戦闘経験や【魔戒騎士】、【仮面ライダー】になれる。

ちなみに、魔戒騎士としての名は【青狼^{せいろう}】仮面ライダーとしての名は【仮面ライダーダークネス】

能力：【創造と終焉を司る程度の能力】：この能力は幸夜が望む物はどんなものでも【本物】を創れることができ、幸夜が邪魔だと思ふ物は、たとえ【世界】でも終焉^{しゅうわん}することができる。幸夜いわくこの能力ほど【矛盾】を表している物はないらしい…

神眼：次元世界の魔眼をすべて扱える。

アンリミテッドワールド

無限世界：固有結界、固有世界を複数所持することができ、

二つの固

有結界を同

時に発動する事が出来る

デバイス：エターナル・ゼロ

所持IS：ホルス

所持武器：聖遺物、クレアチオ創聖架す純白の剣、ヴァイス終焉架す漆黒の剣、シユヴァルツグラデイオ大量殺戮祭、バレット魔戒劍銃、炎刀・迦具土、水刀・玄武刻

CV：下野紘

オリキャラ設定（ネタばれあり）（前書き）

ISとデバイスの設定は、後に出したいと思います。

あと、幸夜の設定を修正しておきました。

オリキャラ設定（ネタばれあり）

名前：鳴海悠二 なるみ ゆうじ

二つ名：神狩り、月の頭脳の夫、人外最悪の相手 パートナー、白き死神 ホワイト・デス・サイダー、地裂
ルアング ランダムノイローゼ、断絶劇場、鎖状僭主、灰燼

種族：人間？

年齢：100歳（外見年齢は16歳）

好きなもの／得意な事：アニメ、松岡修造、仲間、家事、料理、永琳、仕事、家族、仲間、酒、祭り

嫌いなもの／苦手な事：チート転生者、リリなのキャラ、八意印の薬

容姿： 十六夜咲夜を男性化した姿で髪を肩にかかるぐらいの長さで切り揃えている。目の色は金色。身長は高い方で服装は白色のスーツに白色のソフト帽子を被っている。

もともとはWとリリカルなのはが融合したリイマジの世界のライダーであり時空管理局の魔導師だったが、20歳の時にチート転生者に敗れ無実の罪を着せられ投獄。そのまま15年もの間冷や飯を食わされており、出所した時には両親をチート転生者に殺された上、幼なじみであったスバルとティアナもチート転生者に寝取られていた。

復讐心に駆られ無謀にチート転生者率いる機動六課に戦いを挑んだ際に偶然的に力に目覚め、その際にチート転生者を無我夢中で潰し、能力を奪い取った。

世界を渡り数多のチート転生者や神を狩っており、その度に力を奪い取っているため、悠二に勝てるチート転生者はあまりいない。

基本的に全てのライダーに変身出来るが、悠二は主に父親の形見であるロストドライバーとスカルメモリを用いてスカルに変身する方が多い。

実際は100歳だが、チート転生者の能力の中に【不老不死】があり、それを吸収してから何故か16歳のまま成長が止まっている。

クールな見た目に反して明るく飄々とした性格でオタクな熱血漢だが、なのは達やその周りにいるチート転生者を見ると一気に冷徹な殺人鬼に変わる。しかし、転生者達を殺している時に、仕事で転生者を殺しに来た幸夜と遭遇し、そのまま殺し合いをおこない、本当の【殺人鬼】、世界はたくさんあり、それ全てを恨むのは面白いけど、可笑しいと、幸夜から教えてもらい。それ以来、無暗に殺さな

くなり。現在は、幸夜の仕事の相棒パートナーをしている。

ちなみに、幻想郷にいる八意永琳とは結婚していて、子供が一人いる。

能力：【現象殺し】：幻想殺しの上位互換版で、魔法のみならず物理的な現象や概念までもを無効化する力である。

【他者の能力を強制的に剥奪する程度の能力】：名前の通りの能力で、悠二が能力を使うことを意識して触れた場合に発動し、触れた相手は全ての能力を剥奪される

所持デバイス：トライアングルハーツ

所持IS：ジエフティ

所持武器：地裂灰燼スーサイタルファング、断絶劇場ランダムノイローゼ

CV：細谷佳正

第壱話　女子

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の目の前で、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然がありまくりの副担任…山田真耶やまだ まやがそう言った。

季節は春…

新しい命、出会い、世界…ほとんどが新くなる季節…

そんな季節の中、僕こと…博麗幸夜はくれい こうやはIS学園という教室で…

……女子たちの視線を感じていた…

正確には、僕と僕の相棒パートナーである鳴海悠二なるみ ゆうじと、『世界で初めにISを使える男』である織斑一夏おりむら いちかだ。

ここで、このIS学園とISについて説明しよう。

IS…正式名称『インフィニット・ストラトス』は、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツで、開発当初は注目されなかったが、IS製作者である篠ノ之束が引き起こした『白騎士事件』によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワー・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていく…だが、

このISにも欠点があり、『ISは女性にしか動かせない』この欠点のせいで、この【世界】では、女尊男卑の世の中になっている。それで、このIS学園は、IS操縦者を育てる教育機関だ………やっぱり、人間は『戦争』のことしか考えない……まあ、僕的には戦争なんて、ただの小さい子供の喧嘩と一緒にだよ……

「（幸夜、幸夜……）」

そんなことを考えていると、悠二が念話を使ったのか、僕の頭に直接響くように悠二の声が聞こえる。

「（如何したんだ悠二？）」

「（俺、この視線は耐えられない……）」

「（僕もだよ……）」

「は、はいっ?!」

こんな素っ頓狂な声を聞いて、僕と悠二は念話を中止する。

声の主…織斑一夏が涙目になっている山田先生と話しておりその後、後ろを向く…織斑一夏よ、先生を涙目にするほどのことをしたのか？

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

辺りの空気が凍える…かわいそうに、こんな空気の中続きを言うのか…

すると織斑一夏は、深呼吸をして…

「・・・以上です」

がたたっ

織斑一夏の言葉が終ると同時に、女子の数名がずっこけた…

「あ、あのー…」

織斑一夏の後ろからかけられる声。涙目の山田先生がおり、織斑一夏の背後から黒服のサマースーツを着た女性がゆっくりと近づいていき……

パアンッ！

「いつ——！？」

その女性は、織斑一夏の頭を殴り、織斑一夏がその女性の顔を見ると…

「げえっ、関羽！？」

パアンッ！…また織斑一夏が叩かれた…

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声で、その女性が僕たちの方を見る…

「残りの男子二人、さっさと自己紹介をしろ。」

「（悠二どうする？）」

僕は念話で悠二に聞く。

「（俺から言うよ。）よっこらしょ…」

悠二が立ち上がると同時に女子と織斑一夏が一斉に注目する。

「俺の名前は鳴海悠二。尊敬している人物は、松岡修造だ。1年間よろしく願います。」

悠二が席に座る…今度は僕が…

「僕の名前は博麗幸夜。趣味は家事や人形作り、嫌いなものはクズです。それと、こうみえても男です。一年間よろしく願います。」

僕は席に座る……誰だ?!いま、『男の娘』って言った女子生徒!! 零崎始め「……ゴフン、ゴフン……O H A N A S H I してやろうか?!」

と、僕が暴走してるときに、自己紹介が終わったようだ…そして…

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

……カリスマ性があふれ出てるな〜さてと、どうせこの後にはものすごい音波が出ると思うから…耳をふさぎますか…

「きゃあああっ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

クツ？！耳を塞いでいてもこの威力だと？！

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

きゃいきゃい騒ぐ女子たちを織斑先生はかなりうつとおしそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。其れとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「……ポーズ……じゃないな……もうすこし、やさしくしたほうが……」

「きゃああああ！！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

何だ、このクラスは？…変態ばかりなのか？…ここに天子てんしを入れ
たらどうなる？もしくは幽香ゆうかさんがいたらどうなる？………うん、
前者は変態度が上がって、後者はこの教室が血の海になるな………

その後・・・織斑一夏が織斑先生の名前を呼んで叩かれ、SHRは
終わった…

第壱話ゝ女子ゝ（後書き）

後書きは次の話からしていきたいと思います！では！

第貳話　金髪

S H R が終わった後、授業が始まった…

「―であるからして、I S の基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したI S 運用をした場合は、刑法によって罰せられ―」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生……ふと、周りを見てみると、皆熱心にノートを取っている。

やはり、I S を使えるだけあって、勉強熱心だな。…まあ、僕には関係ないけど…僕と悠二はここに来る前にI S について…てか、この【世界】に来る前からI S は知っているから、ノートを取らなくても大丈夫。

そう考えながら、山田先生の方を見ていると、何かの視線を感じ、その場所を見ると……

「……」

織斑一夏が僕と悠二に視線を送っている。

『お前、理解できてるのか？』みたいな目でこちらを見ている織斑一夏……というか、あの目はそう語っている。

とりあえず僕と悠二は『理解できてる。』と言う顔で織斑一夏に返す。

それを受け取った織斑一夏は、何故か安堵の表情になる。

「そこ三人。何をしている」

「お、織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか」

「はい」

それに気付いたのか、織斑先生が声を出し、山田先生が織斑一夏に分からない所があるかと聞き、織斑一夏がそれを正直に答える

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

エヘンとでも言いたそうに胸を張る山田先生………れ、霊夢の方がかわいいんだからな！！！！！！！！べ、別に山田先生が可愛いだなんて思っ
てないんだから！！

と、僕がこんな変なことをしていると、少しの間迷ってから、織斑一夏はハッキリした口調でこう言った…

「ほとんど全部分かりません」

……………織斑一夏、正直すぎるだろ…まあ、正直なのは良いことだ。彼のことを【正直^{リアル}】と名付けようかな？

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

山田先生の問いに、だーれも手を上げない…手が動く気配すらない…

「や、博麗君と鳴海君は大丈夫ですか？　ついてこれてますか？」

山田先生が僕たちの方を見て聞いてくる…きっと、正直と同じ男だから心配してるんだろう…

「俺はしっかりと勉強してきているので大丈夫です。」

「以下同文」

「ええっ！博麗と鳴海も分かってないんじゃないのかよ！！」

僕と悠二の言葉に正直が驚いたようにに言う…あれ？僕と悠二は『理解できてる。』と送ったはずだが？

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

正直の頭に織斑先生の出席簿が直撃する…痛いだろうな……

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

正直はまだ頭を押さえている…織斑先生がこっちの方を向き…

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚えろ」

さすがは織斑先生。

「それと自分は覚えているからいいなどと、甘い考えをするなよ。もう一度言つがISは《兵器》。实力を見誤った愚か者の余裕は、仲間を巻き込んだ事故を引き起こす。」

織斑先生の言うとおりだ……愚者は、仲間さえも巻き込み…殺す…人間の特性のひとつだな。

まあ、僕がそんな奴を見たら、血の伯爵夫人で痛めつけた後、僕の聖遺物の餌にする。
エリザベート・バトリ

「分かったのであれば、授業を続ける。織斑は放課後、山田先生と私で理解できるまで教えてやる。異論はないな？」

「は、はい……」

「……山田先生。授業を続けてください」

「は、はいっ」

こうして、授業は進んでいった……

…今は休み時間

なんだかんだでさっきの休み時間に篠ノ之箒に連れて行かれ、話が
できなかった織斑一夏と話そうかな？

え〜と……どうやって話しかけようか…

よし！これにしよう！！

「さっきの冗談、傑作だぜ」

「戯言なんだよ」

「このネタわかるの？！」

僕が人識ひとしきの坊やの真似して言うと、正直リアリが戯言ざれごと使いの坊やと同じこ
とを言っつて、悠二が驚く……僕も正直驚いたけど……とりあえず、
自己紹介をしようかな？

「改めて、鳴海悠二だ。よろしくな、正直リアリ。」

ちなみに、悠二には念話で僕がつけた二つ名を言っておいた。その時、僕と悠二はさっきの僕と正直リアリと同じことをしている。

「博麗幸夜だ。これからよろしく、正直リアリ。」

「ああ。織斑一夏だ。よろしく頼む鳴海、博麗……て、正直リアリ？」

リアリ正直が首を傾げる。

「ああ、さっき織斑が正直に先生たちに答えてたろ？だから正直リアリ」

「別にそんなに正直に言ってるつもりはないぞ？あ、それと、一夏で良い」

「なら、僕と悠二も名前で良いよ」

さて、自己紹介も終わったし一応、聞いておくか……

「ところで一夏、篠ノ之とはどういう関係なんだ？」

「は？」

「だって、休み時間になるなり廊下に連れ去られてたじゃん。知り合いか？」

「ただの幼馴染だよ。一緒に剣道やってたんだ。六年ぐらい前に転校したつきりだったな……」

「へえ」

「ちょっと、よろしくて？」

「「「え？（は？）」「」」

僕と一夏と悠二がしゃべっていると、誰かに呼ばれ振り返ってみると、そこに居たのは、金髪のドリル頭で白い肌をした女子だった……欧州出身だな。

高貴な感じもないとは言えないが、いかにもこの【世界】の女という感じがした。

「訊いてます？お返事は？」

「よかつたな一夏。早速お呼び出しだぞ」

「何を言ってるんだ？悠二を呼んだんじゃないの？」

「あはは。俺みたいな奴を呼ぶ女なんていないだろ？幸夜か？」

「なら僕は、その事実を否定するわ。」

「貴方達三人を呼んだのです！」

僕たちのやり取りを見て苛立ったのか、金髪ドリルが怒鳴る。

「それで、何？僕たち忙しいんだけど？」

「うつ……まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられることだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

僕が少し睨むと、金髪ドリルが少し怯むが、すぐに勢いを取り戻し喋る……正直、ウザい……

『ISが使えるのは女子だけ』という世界の常識ができてから、『女性』偉い』な構図ができているから、ちよつと散歩のために街中歩いただけで、見ず知らずの女にパシリにされることもごく稀にある。

「焼きそばパン買ってきて。もちろん、あんたの自腹ね」みたいな感じで

大抵は無視して歩けば放置されるが、中には『暴力を振るわれた』なんて訳のわからない事を言い出す奴もいる。そのわけ分らないことに煽られて、事実確認もなしに『逮捕』なんてあるから大概だぶつちやけ言つと、そういう高圧的な奴は目障りだ……

「人と話すときはまず自分の名を名乗るものだろう？それとも、そういう態度すら教わってないのか？貴様は？」

「そうそう。俺たち、君の名前知らない。」

悠二と一夏が金髪ドリルに向かって言う……悠二、少しキレてるな……すると金髪ドリルは、少し声を張り上げ……

「私を知らないといいますの？ この、セシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「ああ、知らない。」

「てか、興味ない」

「・・・貴方達、わたくしをバカにしていませんか？」

金髪ドリル……馬鹿にしてるにきまつてるだろ。

「あorsa、質問いいか？」

一夏が手を挙げて言う。…まさか？

「一夏。この際時間とられるだけの『代表候補生って何？』なんて質問はやめろよ」

僕が考えていたことを悠二が言った。さすが相棒^{パートナー}♪

「・・・」

……一夏は気まずそうに口を閉ざす………まじで？

「読んで字のごとくだ、一夏。IS操縦者の国家代表の候補生だよ」

「そういわれればそうだ」

・・・一夏、それくらい分かつうよ……

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解してただける？」

「興味なし」

「以下同文」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・貴方がた、私をバカにしていますの?」

よく分かってるじゃないか、金髪ドリル……………一夏はどうか知らないけど

「バカニシテナイデスヨ」

「以下同文」

「幸運だっというたの、そっちじゃないか」

「ま、まあ、いいですね。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げててもよろしくてよ!何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!!」

金髪ドリルがそう言うが…

「あれ?俺も倒したぞ、教官」

「俺も」

「以下同文」

「・・・は?」

僕たちの言葉にセシリアが固まる……僕、以下同文しか言っていない……

「じゃ、じゃあ私だけたおしたってというのは……」

「【女子限定】ってオチじゃないの？……チャイムなりそうだから、さっさと席つこうよ。悠二、一夏。出席簿アタックされるよ？」

「え、ああ……」

「そうだな……」

「ちょっと！ そういつて逃げ……」

キンコンカンコン

ちょうど良く3時間目を告げるチャイムが鳴る

「くっ……いいですか！ またあとで来ますから、逃げないでください！」

誰が逃げるか……

三時間目が始まった……

教壇に立つのは織斑先生だ。…余程大切な内容なのだろう、山田先

生もノートを取ってる。

「ああ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表を決めないといけないな。」

織斑先生がふと思い出したように言う……代表かゝめんどくさそうだな

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席……クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

織斑先生の話が終わった後、一斉に女子が手を上げ……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれに賛成！」

「私は鳴海君を……！」

「私は博麗ちゃん……ゲフンゲフン、博麗君を……！」

「では候補は織斑一夏、鳴海悠二、博麗幸夜……他にはないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

誰だ?! 今、僕をちゃん付けで呼ぼうとした奴………って

「……って、俺え（僕う）!?!?」

「織斑、鳴海、博麗、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか？」

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしです！そのような屈辱を、一年間通して味わえとおっしゃるのですか？」

……………何て言ったこいつ？

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、サーカスをする気は毛頭ありません」

……………こいつ日本のこと馬鹿にしてるのか？

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい…」「イギリスだって大しお国じm」「否定するわ…」「え？」「」

金髪ドリルの言葉を一夏が遮り、さらに僕がその声を遮る……………少しだけ、我慢するのを止めよう…………

「聞こえなかったのか、英国人？僕は否定するって言ったんだよ。分からないならもつと詳しく言おうと？英国人、貴様の発言全てを否定するわ。貴様の国を否定するわ。」

僕の変わりように悠二以外が驚く。悠二は、やっぱりと言う表情になっっている。

「なっ……………！あ、あなた！私の祖国の人々を侮辱する気ですか！？」

金髪ドリルの肩が怒りによって震える……こいつ分からないのか？

「あたりまえだ。まず、貴様は僕達の祖国を侮辱しただろ？」

「それは事実を言ったままでしょう！？」

「なら、僕も事実を言ったままでだよ。それとも？自分で言ったことをすぐ忘れる脳なの？にわたりと一緒だね♪」

金髪ドリルはさらに顔を怒りに染めて……

「あーもう！こうなったら決闘ですわ！」

如何してそんなことになるんだ？……戦闘開始はまだしないが、少し人識の坊やの言葉を借りようかな？

「ああ、良いだろう。貴様のその傲慢な態度……刻んで解して並べて揃えて晒してやるよ。……一夏もそれで良いな？」

「ああ、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

どうやら一夏もやる気十分らしい。さすが、正直^{リアリ}だ。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いいえ、奴隷にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなつてやるよ！」

「別にいいよ。僕は絶対、貴様みたいなやつに負けないから」

と言った後、僕達三人は睨み合う……………

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、博麗はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑先生の言葉によって授業が再開する…さて、決闘と言っていたが僕が本気だしたら、うっかり殺しちゃうかもしれないからな…後で、悠二に相談しよう。

第貳話　金髪（後書き）

幽＆幸＆悠「「「？？？のトークショー！！」」」

幽「始まりました。？？？のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

幸「作者？…？？？って何だ？」

悠「大方、まだ後書きの題名が決まっていんだろ？」

幸「まさか」

幽「……………」

幸「……まじで？」

悠「それで、作者からお願いがあるんだと」

幽「読者の皆さま、お願いがあります。このトークショーの題名を考えてくれませんか？お願いします！！」

幸「僕からもお願いします。」

悠「どうかうちの馬鹿作者を助けてやってくれ。」

幸「それと、ゲストの件ですが、次の後書きにしたいと思います。」

悠「それでは、みなさん」

幸&悠&幽「」「さようなら」「」

第参話　訪問者（前書き）

今回は会話文が多いです。

それと、今回は本編にK・H様の名前とK・H様の【幻想とチートと学園？】から龍炎タクト君が来てくれました！！

第参話　訪問者

金髪ドリルと一夏と僕の三人の代表決定戦が決まった後……

「あ~~~~~」

やってしまった……

本来ならあまり目立たないでいようと思っていたのに、思いっきり目立ってしまった……ちきしょう……

普通の奴なら、『相手は代表候補生と戦うなんて言ってしまった。』
と言うと思うが、僕は違う………てか、僕や悠二の場合【代表候補生】や【国家代表】なんて雑魚に近い………けど、めんどくさい。
何がめんどくさいと言うと、【生かした状態】で倒すこと、悠二なら簡単にやるかもしれないけど、僕にとっては結構難しい……はあ、
基本的に僕は【殺人鬼】だ……この体はたくさんさんの血で汚れてる……相手を殺した方が楽だ……

「幸夜……。大丈夫なのか？」

「一応、大丈夫だよ。一夏は？」

「……大丈夫な訳がないだろう」

「そうか……」

「「はあ……」」

「溜息するぐらいなら、決闘なんか受けるなよ…」

悠二が呆れたように言う……………だって、金髪ドリルが日本のことを馬鹿にしたんだもん…

「あ、織斑君、博麗君、鳴海君。まだ教室に居たんですね。よかったです」

声が聞こえた方を見てみると、山田先生がいた

「あ、山田先生。どうしました？」

「えつとですね・・・寮の部屋が決まりました」

そういつて番号の書かれたキーを僕と悠二と一夏の三人にくれる山田先生。…あれ？確か僕達って…………

「俺の部屋、決まっていなかったですか？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺も、そう聞きましたけど。」

「以下同文」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。・・・三人とも、そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

どうやら政府……………日本政府の指示らしいな。妥当な案だろう、なんせ前例のない『男』のIS操縦者なのだ、国としても監視と保

護の両方を兼ねているんだろう。

「そう言うわけで政府特権もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人の方も用意できますから、しばらくは我慢してくださいね」

「そうですか、部屋の件はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「僕達も一度、荷物を取りに帰っていいですか？」

「あ、いえ、二人の荷物なら・・・」

「私が手配しておいたやつた。ありがたく思え」

と、織斑先生の声が聞こえた……………あれ？どうして、ダースベードーの曲が聞こえたんだろう？

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな、それと、鳴海と博麗の荷物は【^{うえん}龍炎タクト】と言う人物が持ってきて、外で待っているらしい。取りに行つてやれ。」

「「タクト（君）が?!」」

僕と悠二は織斑先生の口から出てきた名前に驚く……………どうして、タクト君がこの【世界】に？

「なら、僕が取りに行きます。（悠二、如何思う？）」「

「分かった。（さあな？とりあえず行つて来い。その時間けばいい
だろ？）」

僕と悠二は会話をしながら、念話をする。

「あと、博麗君と鳴海君は一緒の部屋ですからね。じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。部屋には個別にシャワーがあるので、当面はそちらをつかってください」

「そちらってことは、他にもあるんですか？」

「はい、大浴場がありますが、三人は今は使えません」

「え、何ですか」

・・・一夏、キミは本当に正直リアリだよ。

「一夏は、同年代の見知らぬ女子大勢と一緒に風呂に入りたいの？」

僕と悠二の場合、同世代じゃないけど…

「あ・・・」

「お、織斑君は女子とお風呂に入りたいんですか！？　だつ、ダメですよ」

「いえはいりたくないです」

一夏は気づいたように呟き、山田先生が慌て始め、そんな山田先生に対して一夏が即答する…まさか?!

「ん?どうしたんだ二人とも?」

「いや、ナンデモナイヨ」

僕と悠二が自分のお尻を守るように手を当てて、一夏から少し離れる。

で、そんな会話が伝播したのか、廊下の女子は腐女s・・・ゲフン!ゲフン!『婦女子談義』が始まっていた

『織斑君・・・男にしか興味ないのかしら?』

『それはそれで・・・いいわね』

『「幸夜、俺もう・・・」「こんなところでダメだよ・・・」あつ・・・』

『悠二×幸夜』

『「フッフ、行け幸夜?」「ゆ、悠二い」』

『「有りね!」』

「「有りじゃねえよ!」」

僕と悠二の声が綺麗に重なる。一夏はどうか知らないけど、僕達はノンケだ!

「俺もノンケだよっ！　まだそういうのに興味がないだけで」

「……………」

「おい？！二人ともどうして俺からさらに離れるんだ！！？」

とりあえず、荷物を取りに行くか……………

〃〃〃

僕は荷物を取りに行く為に、IS学園の外にある町の外れに行くと、そこには、身長が185cmで、顔は中性型、目も髪も黒色と純和風の少年がトランクケースを持って立っていた…

「久しぶりだな、幸夜」

「久しぶり、タクト君」

僕とタクト君は挨拶を交わす……………

「荷物を持ってきてくれてありがとう。でも、どうしてタクト君がこの【世界】に？」

「ああ、それはな、K・Hに頼まれたんだよ」

「K・H様に？」

「ああ、とりあえずアタツシユケースの中身見てみる。」

「分かった……………って、うわっ?!」

僕はタクト君に言われたとおりに、中身を見ると何かが僕に跳びついて来る……………って?!

「これって、【アルト】の【プライミッツ・マードー】じゃないか?!」

僕の目の前で尻尾を振っている、小型犬…本当ならもっと大きいはずだが…プライミッツ・マードー…人類殺しが立っていた。

「ああ、そいつはK・Hが創った聖遺物だ。」

「聖遺物?! って、どうやって、創ったの?!」

「K・Hが暇つぶしにトリマーまがいのやってたら、プライミッツ連れたアルトルージュが来たから洗つてるときに二、三本の抜け毛を拝借したらしいぞ。」

「……………ほんと、K・H様には驚かされるよ。」

ほんとと規格外だね、K・H様は……………

「それと、その中にはISの専用武器とか、プログラムが入ってるからな。」

「ありがとう。」

「別に良いって、それじゃあ、帰るわ。幸夜、【スキマ】お願いできるか？」

「うん、良いよ。」

僕はタクト君の背後に親譲りの【スキマ】を開き、その中に、タクト君が入ったのを確認して、スキマを閉じる……さて…

「いい加減、出てきたらどうだい？」

僕の呼びかけに後ろから、普通の人ではありえない、髪の色や、瞳の色をした人間が出てきた……

「【転生者】か？どうせ、【世界の意思】から僕と悠二を殺せって言ってきたんだろ？」

僕の問いに、二人の【転生者】は無言で、何処からか黒と白の夫婦剣【干将・莫耶^{かんしょう・ばくや}】を取り出し、構える。

「それが、答えか……」

ドン！

「ッ？！」

二人の転生者が地面に突き刺さった僕の愛用の武器……『^{オーバーキル}大量殺戮^{バレイド}』を見て驚く、『^{オーバーキルバレイド}大量殺戮祭』は長さが三メートルを超し、横幅も広い大剣で、刃の淵には首を狩るためだけにある穴が付いてい

第参話　訪問者（後書き）

幽&幸&悠「「「???のトークショー!」」」

幽「始まりました。???のトークショー!司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします!」

幸「まだ、???なのか…」

幽「そうだな…まあ、気を取り直して…なんと、今回は???トークショー初のゲストが来てくれてるんだ!」

悠「なんだって?!」

幽「それじゃあ、幸夜!」

幸「了解!今回は【息抜きカオス雑談!】から風見大介君とそのデバイス、ライダーさんと大介君の分身さんが来てくれました!」

大&分&ラ「「「こんにちわ」」」

幸&悠&幽「「「こんにちわ」」」

幸「さて、今日は一体何をやるんだ?」

幽「今回か?今回は俺の質問に答えてもらおう!」

大「質問？」

幽「そう、質問！質問の方はこちら！！」

【幸夜と悠二と大介君達どっちが強い？】

幽「d「大介君達。」幸夜、即答？！」

幸「うん、悠二は分からないけど。たぶん僕と大介君が戦ったら、引き分けか、僕の負けだと思っよ。」

ラ「どうしてそう思うんですか？」

幸「それはねライダーさん……………【相手を生かす勝負】だからだよ。」

幽「それって一体どういうことだ？」

幸「僕は【殺人鬼】だよ。人を【殺すこと】には特化してるけど、人を生かすことは難しいんだよ。」

分「そうなんですか……………」

幽「じゃあ、悠二と大介君達の場合は？」

悠「それは…失礼かもしれないけど、俺じゃないかな？ほら、俺の能力【相手の能力を強制略奪】するし……………うゝん、だけど……………」

幽「とりあえず、今回はここで終了しよう。」

大「そうだな。」

幽「それと、読者の皆さま、お願いがあります。このトークショーの題名を考えてくれませんか？お願いします！！」

大「俺からもお願いするぜ。」

幸「それじゃあ、大介君達にC4爆弾と龍騎ライダーズのカードデツキ（オーデイン）除くをプレゼント！！」

悠「それでは、みなさん」

幸＆悠＆幽＆大＆分＆ラ「「「「「さようなら」」」」」

第四話、青騎士（前書き）

今回も会話文が多く、急展開です。

第四話　青騎士

幸夜がタクトの所に荷物を取りに言っている間、俺は寮にある俺と幸夜の部屋でくつろいでいる。

先程、隣の部屋から、一夏と篠ノ之の声が聞こえてきたが………一夏、何をやってんだ？

「さてと、そろそろかな？」

俺の言葉と同時に空間が裂け、そこから無数の眼が見える空間……【スキマ】が開かれ、【スキマ】の中から、大きいアタツシユケースを持った、全身【血塗れ】の幸夜が………って、血塗れ？！

「こ、幸夜？！お前、如何してそんな血塗れに？！」

「転生者……」

幸夜の言葉に俺はどうして幸夜が血塗れなのか納得する。

「お前、【零崎】になつたろ」

「YES!!」

幸夜が満面の笑顔で言う……ハア

「ハア………とりあえずシャワー浴びてこい。荷物の確認はそのあとだ」

「了解」

幸夜がバスタオルと部屋着を持って、シャワールームの方に向かう

.....

side out

side 幸夜

「ふう〜さっぱりした」

僕は濡れた髪をタオルで拭く。え？シャワーを浴びてるシーンはどうしたって？野郎のシャワーシーンは見なくて良いでしょう？さて、タクト君が持ってきてくれた荷物を確認しようかな？

「幸夜、荷物を見るぞ。」

「分かった」

悠二がアタツシユケースの中身を取り出していくと、アタツシユケースの中から、人形製作用の道具、悠二専用の武器、スーサイドアルファランダムノイズ地裂灰燼、断絶劇場、ISのプログラムが出てきた。

「悠二、それだけ？」

「ああ…うん？待て、奥に何かあるぞ。」

悠二がアタツシユケースの奥に手を入れて、引き出し、悠二が取り出したのは……

「エターナル？！」

「ハーツ？！」

「お久しぶりです。マスター」

「久しぶり。マイスター」

悠二が取り出したのは、青い宝石が付いている指輪と赤いスプレー缶……【あの時】壊れたはずの、僕の相機デバイス【エターナル・ゼロ】と悠二の相機デバイス【トライアングルハーツ】だった。

「エターナル…どうして？」

「ハーツもだ…お前ら、【あの時】壊れたはずだろ？」

「はい。それは、マスターの母である【八雲紫】様が私たちを直して下さったのです。」

か、母さんが？…まあ、母さんがどうして直したか分からないけど…

「エターナル、また会えても嬉しいよ」

「俺もだ、ハーツ」

どうやら悠二も僕と同じ気持ちらしい…

「私達もです。マスター」

「これからよろしくお願いしますよ。マイスター」

「ああ、よろしく。」

僕はエターナルを右手の人差指に嵌め、悠二はトライアングルハーツを懷に仕舞う。

「さて、あとはこのISのプログラムと武装を組み込むだけだな。」

「そうだね。」

「幸夜、じゃあ、お願い。」

「了解」
エリアワークス
「クリエイト・オン
空間製作、創造開始」

僕はこの部屋を【創造と終焉を司る程度の能力】で、ISを整備できる空間に変え、いろいろな機材を創る。ちなみに、他の人には見られないように、認識障害はしてある。

~~~~~

ISの整備が終わった後、僕達は眠ろうとベットの中に入ろうとしていた……………

ちなみに、現在の時刻は24:00……………うん、結構時間が経ってしまった。

そして、僕達が眠ろうとした瞬間……………

「マスター！！ホラーの気配です！！」

「マイスター！！堕天使の気配です！！」

エターナルと、トライアングルハーツの声によって、僕達二人の眠気が吹き飛ぶ。

僕はいつも来ている、黒色のコートを着て悠二は白色のスーツを着る。

「エターナル、トライアングルハート、ホラーと堕天使の位置は分かる？」

「「はい、分かります。」」

「なら、【スキマ】を開くから、そこからの道案内よろしくね。」

僕は、悠二と僕の足元に【スキマ】を開き、ホラーと堕天使がいる所に向かう。

）side out）

）side 悠二）

「よつと。」

俺は幸夜の【スキマ】から出ると、何処かの廃屋にだった。

「ハーツ、堕天使の場所は？」

「此処を暫く前に進んだところです。進んでみましょう。」

「了解…」

俺は気持ちを引き締めて前に進む…

堕天使…それは、天界に住んでいる天使が【欲】をだし、堕ちた存在…

グチヨ、グチヨ

俺の耳に何かの咀嚼音が聞こえ、そこを見ると、黒い翼にひび割れた皮膚、所々から血が出ている生物…【堕天使】がいた。

ゴトツ

何かが落ちる音が聞こえ、そこを見ると、顔がグチャグチャで性別が判断できないが、【人間】の頭が落ちていた……

こいつ、人間を食っていたのか…

俺は、懷からハーツを取り出し……

「松岡SHU造…」

「セットアップ」

俺の服が白いスーツから、赤い着物に灰色の袴姿になり、手にはレイジングハートのエクシードモードと同じ槍型で、刃は赤色…【ブラストフォーム】になる。

「非殺傷設定解除」

「非殺傷設定解除」



る程度の能力】で奪った【直死の魔眼】だ。

【直死の魔眼】は、ものが内包する【死】を視覚情報として捉える事のできる魔眼で、これで見える線は、モノの死にやすい部分で、線に沿って切る事によってその個所を死に至らしめる事ができ、本体の生死いかんによらず動く事も治癒・再生も不可能にすることができ、点の方は、モノの死そのもので、突くとその本体は死ぬ。

この能力で俺は堕天使を殺した……さて、後はここの後始末をするだけだ……

） s i d e o u t ）

） s i d e 幸夜 ）

僕が【スキマ】から出ると、そこは、森だった。

僕は腰に付けてある、ホラーを狩る為だけの武器、銃に剣が付いたような武器……【魔戒剣銃】を取り出し、構える。

ホラー……それは、僕が知ってる【魔界】とは違う【魔界】呼ばれる世界の住人で、古代から【魔戒騎士】と戦ってきた、森羅万象あらゆるものに存在する闇……“陰我”に寄生する怪物……こいつらは、いろいろな物に寄生して、人間を喰らう。

「エターナル、今回のホラーは何？」

「今回は森ですから、たぶん、ホラー【ナチュラル】だと思います。森の陰我から出現して、木などに寄生して、近づいてきた人間を喰らうホラーです。」

「そうか……」

僕が魔戒剣銃を持ちながら、辺りを警戒していると……

「キシヤアアアア！！！！！！！！！！」

「チツ？！」

上から奇声をあげながら【何か】が落ちてくるので、僕はそれを後ろに跳ぶことで避ける。

そして、僕がさっきまでいた場所には糞虫のように【落葉】や【木

の枝】を体の周りに付いた、人型の生物がいた。

「エターナル？」

「はい。あれが、ホラー ナチュラルです。」

エターナルが言った言葉に、僕は気を引き締める。そして、ナチュラルの足元に人間が着ていたであろう服が落ちている。

「貴様……何をしに此处へ来た。餌になりに来たのか」

ナチュラルが人では聞き取れないであろう言葉でしゃべる。

「僕は餌になりに来たわけじゃない…お前を狩りに来た。」

僕はナチュラルに魔界剣銃を見せる。

「それは?!……………そうか、貴様が最近噂になっている【青騎士】か？」

「ああ、そうだ。」

「そうか……………ならば！」

ナチュラルが後ろに跳び、着地すると、ナチュラルの体の周りについていた、落葉や木の枝が剥がれ、悪魔のような顔で、体の肉が丸見えの生物になる。

「ハハハ！これで貴様は終わりだ!!!」

ナチュラルが捨てた、葉と枝が合体し、巨大な槍になり僕を貫こうと向かってくるが、僕は魔戒剣銃の引き金を引き、槍を破壊する。

「マスター？」

「分かってるよ。エターナル」

僕は、魔戒剣銃を空に掲げ、魔戒銃剣についている、剣で円を描くようにして回し、その円の中心に向かって引き金を引き、そのまま魔戒剣銃を勢いよく振り下ろすと同時に、空中で描かれた円から眩しい光があふれ出す。

そして瞬きするかどうかの刹那、魔戒剣銃はさつき持っていた時よりも大きく色も青色に変わり、僕の体は青色に輝く鎧と、狼を模ったようなフルフェイスのマスクに覆われ、僕は【青騎士・青狼<sup>セイロ</sup>】に変わる。

「貴様の陰我、僕が断ち切る！！」

僕は地面を蹴り、ナチュラルとの距離を一気に詰め、上空に蹴り飛ばし、僕も上の方に跳躍して、魔戒剣銃の引き金を連続で引きながら近づいていき…

「破ッ！！」

「  
“  
ガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
”  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
」

魔戒剣銃についている刃でナチュラルを斬り裂く。

切り裂かれたナチュラルの体は、火花を散らしながら消滅する。

「マスター」

「どうした、エターナル？」

「もう、明け方です。」

「…え？」

エターナルの言った言葉に僕は辺りを見渡すと、……

「本当だ、日が昇ってるや」

僕、結局一睡も出来なかった………

#### 第四話く青騎士く（後書き）

幽&幸&悠「「「「」」」」のトークショー!」」」

幽「始まりました。???のトークショー!司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします!」

幸「まだ、???なのか…」

幽「幸夜、違うぞ…違うぞ!」

悠「何が違うんだ?」

幽「なんと!!このトークショーの名前が決まったんだ!」

幸&悠「「本当か?!」」

幽「ああ!今から言う題名は夜神様が考えてくれた。」

幸「夜神様、ありがとうございます!」

幽「それじゃあ、発表です!」

悠「トークショーの題名は!」

【紅<sup>くれない</sup> 幸二<sup>しんじ</sup>のトークショー！】

幽「です！」

幸「紅 幸二のトークショー？」

悠「ああ由来が…」

紅 幽鹿から『紅』の一字

博麗 幸夜から『幸』の一字

鳴海 悠二から『二』の一字

〈説明〉

基本、紅 幽鹿を司会に幸夜と悠二の三人で進行していくので  
三人の名前を合わせたコーナー名

悠「だ、そつだ。」

幽「夜神様、ほんとうにありがとうございました!!」

悠「それじゃあ今回の紅 幸二のトークショーは終了だ。みなさん  
！」

幸&悠&幽「」「さようなら」「」



## 第伍話　白式

入学式翌日の朝、僕と悠二は結局一睡も出来ずに朝を迎えた。

「ちくしょう、俺の貴重な睡眠時間が!!」

悠二その気持ちは分かるけど、部屋で暴れるのはやめようよ。

「悠二、僕は一刻も早く食堂に行きたいんだけど?」

さつきから、お腹が空いてしょうがない。

「ああ、分かった。それじゃあ、行こうぜ!」

僕と悠二は部屋から出て、食堂の方に向かう。

向かう途中、『誰、あの美人なひと?』とか『リアル男の娘』とか言われてたけど………気にしてないんだからね(泣)!!

と、こんなことをしているうちに食堂に着いたわけだが………

「う、幸夜…お前そんなに喰うのか?」

「当然だ」

悠二が、僕が食べようとしている食事の量に驚いている。ちなみに、僕が頼んだものは、パスタ、ラーメン、パン、カレー、月見そば、それぞれ五人前だ。………一応、これでも量は抑えてるんだよ。

「まあ、いつものことだよな……いただきます」

悠二が呆れたような表情で言っ、自分が頼んだメニューである和食セットの、ご飯と納豆、鮭の切り身と味噌汁を食べていく。

「いただきますー!!」

さて何から食べようかなーよし!そばから食べよう!!

僕は箸でそばを掴み、食べようとすると……

「おっ、幸夜に悠二じゃないか。隣、良いか?」

悠二と同じ和食セットを持った、一夏と篠ノ之さんが僕達の所に来ていた。

「うん、別にいいよ。」

「わるいな、幸夜、悠二」

一夏と篠ノ之さんが席に座る。そうだ、一応自己紹介しておかないと……

「初めまして篠ノ之さん、僕は博麗幸夜。それで、こっちが……」

「鳴海悠二だ。よろしく篠ノ之」

「ああ、私は篠ノ之箒だ。それと、苗字はあまり好きではないんだ、よろしく頼む。」

篠ノ之さんの言葉に、僕と悠二はやっぱりと思う。

はあゝ篠ノ之の奴、相当嫌われてるぞこれは……………

僕と悠二は心の中で溜息をつく。

「ねえねえ、彼らが噂の男子だって」

「しかも、そのうちの一人は、千冬お姉さまの弟らしいわよ。」

「リアル男の娘…ハアハア…」

「銀髪の人、かつこいい」

……………何故だろう？今、確実に変質者がいたようだが…気のせいかな？

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

気がつくと、一夏の隣に朝食のトレイを持った女子が三人いた。

「ああ、別にいいけど」

一夏がそう言うのと、声をかけた女子から安堵のため息を漏らし、後ろにいる二人の女子が小さくガッツポーズをする。おおゝ篝さんの不機嫌オーラが出ているぞ、一夏。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

夜を少なめに？もしかして、健康に良いんだろうか？まあ、僕の場合、夜は今の倍以上は喰うけどね。さてと、

「一夏、僕と悠二はもう食べたから先に教室に行くね。」

「じゃあな、一夏」

僕と悠二はトレーを持ち、食器の片付けに向かった。

~~~~~

今は二時間目の授業後の放課だ。

さっきの授業では、山田先生の【ブラジャー】発言で授業中、【奇妙な視線】を感じ続けるという奇妙な体験をした。

パンツ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

僕が物思いに耽っていると、いつのまにか一夏が織斑先生に叩かれ

ていた。

「（悠二、どうして一夏は叩かれたの？）」

「（それはね、織斑先生の個人情報バラそうとしたからだよ）」

「（そーなのか）」

「（そーなのだ）」

悠二と念話で話してると……………

パンツ！

「危なッ?!」

「ちよっ?!」

織斑先生の出席簿アタックが僕達に放たれ、僕と悠二はそれを避ける…出席簿、僕達に当たる前に音が鳴ってたよ?!って、そんなことじゃなくて…

「「織斑先生!どうして僕（俺）達は叩かれそうになったのでしょうか!?!」」

「何か失礼なことを考えていただろう?」

「「イイエ、ソナナコトアリマセン」」

織斑先生にはさとりさんと同じ【心を読む程度の能力】を持ってい

るのだろうか？

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を準備するそう
だ」

「????」

織斑先生の言葉に、疑問の表情になる一夏…一夏のやつ、【専用機】
のこと絶対知らないな。

「（マスター、マスター）」

「（うん？どうしたの、エターナル？）」

「（マスター？専用機って何ですか？）」

…此処にもいたよ、専用機を知らない人が…あれ？エターナルは人
じゃないから…知らないデバイス？

「（まず簡単に言うとな。1、ISは世界に476機しか存在しな
い。2、コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもう作って
いない。…つまり、専用機って言うのは国家や企業に所属する人間
しか与えられないんだよ。）」

「（それじゃあ、マスター？織斑さんは、モルモット実験体なんですね）」

…エターナル、結構きついこと言っただね。

「幸夜、幸夜」

エターナルと念話で会話していると、悠二が話しかけてきた。

「何？悠二」

「一夏達、何処かに行っちゃったぜ」

「え？」

悠二の言葉を聞き、僕は周りを見渡すと、一夏と、篝さんが消えていた…

~~~~~

今日は代表決定戦の日だ。

………うん？時間が飛び過ぎてるって、細かいことは気にしちゃいけないよ。

と、色々あって僕と悠二、一夏と篝さんはピットの中にいる。

「——なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「何、一夏？」

一夏の言葉に箒さんが答える。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISのことを教えてくれるはなしはどうなったんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすな」

一夏の疑問に箒さんが無言で眼を逸らし、一夏がそれをツッコム。確か一夏はこの日が来るまで、ISの訓練は一切せず、箒さんと一緒に剣道をやっていたそうだ。

「し、仕方ないがないだろう。お前のISもなかったのだから」

「まあ、そうだけど——じゃない！知識とか基本的なこととか、あったらろ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすなっ」

さっきと同じような行動をする二人。

一夏は政府から専用機が用意されるのだが、そのISはまだ届いていないらしい、今もまだ………てか、さっき悠二にも確認取ってみたけれど、一夏のISって絶対、篠ノ之が用意してるだろうな。しかもアイツのことだ。試合ぎりぎりに来た方が面白いと思ってるんだろう。

「……………」

一夏と篤が沈黙すると、山田先生が慌しくピットに入ってきた

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生、慌てていても名字は三回言わなくっても良いですよ……なんか、怖いですよ。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す~~~~~は~~~~、す~~~~~は~~~~」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

きつと一夏は冗談で言ったであろう言葉で、山田先生は本気で息を止めた。そして、みるみる顔が赤くなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

一夏、絶対止めるタイミングを逃しただけだな。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パンツ！つと、一夏は叩かれる…痛そう…けど、慧音さんの頭突きの方が痛いと思うがな！！

「千冬姉……」

パンツ！

一夏がまた叩かれる。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね。」

酷ッ？！実の弟に死ねって言ったよ、ふと隣を見ると悠二の顔も引き攣っていた。

「そ、そ、それですね！来ました！織斑君の専用IS！」

「行こう、一夏」

どうやら、間に合っただけらしい。ほんと、悪趣味だな篠ノ之は……

僕は織斑先生に先導されて、ピット搬入口に向かうと、ゆっくりと防壁扉が開く。するとそこには……

……そこには、『白』がいた。

「これが……」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

真っ白のそれ。無機質なそれが、まるで一夏を待っているように……  
……【自分の主】を待つようにいた。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がなフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

一夏が白式に背中を預けるように座ると、白式が一夏の体に装着される。

「一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。行ける」

「そうか」

織斑先生のほつとしたような声……けどこれは、僕と悠二ISを装着している一夏しか分らない程のブレだろう……

「一夏……」

「第」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

さて、僕も一夏に言おうかね。

「一夏」

「何だ、幸夜？」

俺は出来る限りの満面の笑顔で…

「あの金髪ドリルの傲慢な態度へし折ってこい！！」

僕の言葉に一夏が引き攣った表情で

「その笑顔でそれって…けど、へし折ってくるさ！！」

一夏は白式と一緒に飛び立つ…

金髪ドリル…いや、【イギリス代表候補生】セシリア・オルコットとその専用機『ブルー・ティアーズ』が待つ、戦いの場所に……

## 第五話〜白式〜（後書き）

幽&幸&悠「」「紅 幸二のトークショー!!」「」

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー!司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします!!」

悠「それで作者、今回は何をするんだ?」

幽「そうだな〜…って、無いな〜」

悠&幸「無いのかよ?!」「」

幽「というわけで、それじゃあ今回の紅 幸二のトークショーは終了です。みなさん!」

幽「さようなら〜」

幸&悠「勝手に終わらすな!!」「」

## 第六話　青い雫

一夏とセシリアの試合が始まって時間が経った…

一夏は最初の方こそ劣勢だったが、金髪ドリルのブルー・ティーズに搭載されているビット型の武器『ブルー・ティーズ』の弱点を見抜き、次々と『ブルー・ティーズ』を破壊していく。

「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

ピットにあるリアルタイムモニターを見ている山田先生が息混じりに呟く。…確かに一夏はすごい。ISの起動は二回だけ、しかも戦闘は初めてと思えない健闘ぶりだ……。…ただ

「あの馬鹿者。浮かれてるな」

「織斑先生、分かるんですか？」

織斑先生の言葉に悠二が反応する。さすが、兄弟と言ったところか？一夏の奴、油断してる。これは、僕と悠二、織斑先生しか気づいてないけど。

そして、織斑先生が悠二の疑問を答えるように口を開く

「さっきから左手を閉じたり開いたりしてるだろう。あれは、あい



「一夏っ！」

箒さんが声を上げる…けど

「ハアゝ一夏の奴」

「機体に救われたな、馬鹿者め」

悠二と織斑先生の順番で言うと、煙が弾けるように弾き飛ばされる。そしてその中心には、純白の機体があった。

さてと、僕もそろそろ準備しようかな？

~~~~~

今は一夏と金髪ドリルの試合が終わった後で、一夏は、箒さんと織斑先生の説教を受けている。

試合結果？…結果は一夏の負け。理由は、自分のISの武器の特性を把握できていなかったからだ。

「博麗、今度はお前だ。準備をしろ」

一夏の説教が終わった織斑先生と箒さん、そして、何処か疲れている一夏が近づいてくる。

僕は首に掛けてあるISの待機状態の赤い鳥の翼を象ったペンダントを掴み意識を集中して…………

「行くよ、ホルス」

次の瞬間、スマートな外観で脚部が長く、カラーは赤と金で、背中に四枚の鳥の翼を象ったウイング型の機動兵装『ウィスプ』が付いている、僕の専用IS『ホルス』が装着される。

「幸夜、頑張つてこいよ！」

「私も応援してるぞ」

「幸夜、勝てよー!!」

一夏、箒、悠二が僕に応援の言葉を言ってくれる。僕は一夏達に背中を向けたまま…………

「一夏、悠二、箒さん、試合は頑張ってくるけど——別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

「」「ああ!!」「」

悠二と一夏と箒さんの声が重なる。

僕は三人の応援を受けて、空に飛び上がると、金髪ドリル…否、セシリア・オルコットが『スターライトmk?』を手にした状態で待っていた。

「遅いですわよ！待ちくたびれましたわ！」

そう言うセシリア・オルコットは、先程まであったあのウザったい傲慢な雰囲気は消えていた……一夏のおかげか？

「ああ、遅れてすまない」

僕は素直に謝り、思考を全てを【戦闘】に切り替え、ホルスの装備の一つである日本刀型の電磁式の剣『村正』を『展開』し、正眼で構える。

「セシリア・オルコット」

「な、なんですか？」

「本気で行くぞ！」

「それは此方のセリフですわー！」

直後、ホルスからの警告音が鳴り、セシリア・オルコットが『スターライトmk?』の引き金を引き、僕の方にレーザーが向かってくるが、それを必要最低限の動きで避ける。

「初撃はサービスだ…避けるー！」

「なっ?!」

セシリア・オルコットが僕の行動を見て驚き、一瞬動きが止まる。

セシリア・オルコットが驚いた原因…それは、僕が『村正』をセシリア・オルコットに向かって投擲したからだ。

セシリア・オルコットは止まっていた体を動かし、『村正』をなんとか避けようとするが、肩に直撃して、セシリア・オルコットのシールドエネルギーが削られる。

「クッ、流石に今のは驚きましたが、これであなたの近接武器はありません！！この勝負負いましたわ！！」

セシリア・オルコットが四機の『ブルー・ティアーズ』からレーザーが放たれる。無防備な僕に対して、四機での攻撃…確かに良い攻撃だが…

「甘い！！」

「なっ？！」

僕はタクト君から貰った、天下五刀の一本、童子切りを元に作られたIS用近接ブレード『童子切Mk-?』を『展開』して、レーザーを全て斬り落とす。

「ハッ！」

「同じ攻撃は通用しませんわ！！」

僕は先程と同じように『童子切Mk-?』をセシリア・オルコット

に向かって投擲するが、セシリア・オルコットは当然のように避ける…だけど…

「きゃあ?!」

先程投擲した『村正』に『童子切Mk-?』が当たり、二つの剣はセシリア・オルコットの背中に直撃して、セシリア・オルコットのシールドエネルギーは削って、僕の手元に戻ってくる。

僕は『村正』を肩に『童子切Mk-?』の切っ先をセシリア・オルコットに向けて…

「行くぞ、【イギリス代表候補生】セシリア・オルコット…これからの戦い、今まで通りだと思っな!!」

「来なさい!!」

セシリア・オルコットが『スターライトmk?』からレーザーを放ち、僕はそれを『村正』と『童子切Mk-?』で切り裂いていく。

＼side out＼

＼side 悠二＼

幸夜がセシリア・オルコットと戦闘を始めると、ピット内は俺を除き驚きと言う表情で満ち溢れていた。あの織斑先生も驚いていた…

まあ…それは、しょうがないだろう…なにせ、手に持っていた剣を投擲して、さらにもう一つの剣を投擲、避けられたが、最初から計算していたかのように、避けられた剣がもう一本の剣と当たり、二つともセシリア・オルコットに直撃し、剣が手に戻ったからだろう。

「…箒、幸夜って強いな」

「あ、ああ」

一夏の言葉に箒さんが肯定する。

「鳴海、博麗のことで少し質問があるが良いか？」

「答えれる範囲なら良いですよ。織斑先生」

織斑先生が此方を向き質問してくるので、俺はあらかじめ釘を打っておく……さすがに織斑先生でも聞かないと思うが、一応な…

「私には博麗がさつきから、セシリアよりも二歩三歩と先を言ったような考えをしているように見えるんだが、如何いうことだ？」

…すごいな織斑先生、本当なら戦っている相手にしか分からないと思うが、こちらで見ているだけで当ててしまうのか…まあ、この質問は答えるかな。

「あの幸夜の動きはですね、『思考分割』と『高速思考』です」

「『思考分割』？『高速思考』？」

俺の言葉に一夏が首をかしげ、一夏ほど表に出してはないが、山田先生と篤さんの顔には疑問の表情が浮かんでいる。

「『思考分割』は、思考を仮想的に分割し、複数の思考を同時に行うことで、並列して思考を行うから、例えば思考を3つに分けたとしても、3つあるからといって3倍になるわけではなく、4倍5倍の思考速度にする技能で、『高速思考』は、思考速度を上げる技能です。しかも技能で戦闘を行うと相手は未来視されていると思います。」

「へえ〜凄いですね、博麗君」

「才能ってやつn「ハハハハハ！」い、行き成りどうしたんだよ悠二？！」

「悪い、悪い…まさか、幸夜について【才能】って言葉が出るとは思わなくてな」

俺は一夏の口から出た言葉に笑いが止まらない。

「だってそうだろ？『思考分割』、『高速思考』って言う技能があるんだろ？それは【才能】じゃないのか？」

「あゝ違う、違う。一夏、勘違いしてると思うけど、幸夜に才能なんかないぜ」

「へ？」

俺の言葉に一夏が間抜けな声を出す。

「あいつは【あること】以外は、二流なんだよ。あ、一応言っておくが、セシリア・オルコットは仮にも代表候補生だから、一流なおつと、二流がどうして一流をあんなに圧倒してるんだって言う質問は、無しだ。あえて言うなら、あいつは、【超一流に勝てる努力をしている超二流】ってことだ。」

俺の言葉に一夏や箒さんが質問しようとするが、その質問を言わせる前に俺は答える……………あいつ博麗幸夜は、創ることや終焉^{こわす}こと、人形作り…そして【人を殺す】こと以外はすべて、二流…だけど、創ることや終焉^{こわす}こと、人形作り、人を殺すことは超一流を超える規格外^{バケモノ}……………まあ、規格外で当然か……………なにせ、俺と幸夜は……………人外なのだから…

｝side out｝

｝side 幸夜｝

「ハア…ハア…ハア」

僕の目の前にいるセシリア・オルコットは息が乱れ、肩で息をしている状態になっている。

僕は時間と自分の残りのシールドエネルギー……まあ、あまり減ってはいないが……僕はセシリア・オルコットにある提案をする。

「セシリア・オルコット、提案があるんだが良いか？」

「提案？言っておきますが、降参はしませんことよ」

「あゝ違う違う。僕の提案は、次の一撃で最後にしようと言う提案だよ。」

「如何いことですか？」

セシリア・オルコットが僕の言葉に疑問をもち、僕の攻撃を警戒しながら聞いてくる。

「言葉通りだ。そろそろ時間も無くなってきたからな。タイムアップになったら、僕の勝ちになるけど、がそれじゃあ僕の後味が良くないし、貴様もタイムアップで負けなんて嫌だろ？だから今使ってる武装の最大の攻撃で決着をつけようと思うんだけど……どうかな？」

僕の言葉にセシリア・オルコットは言葉ではなく、『スターライトmk?』と『ブルー・ティアーズ』を僕に向けることで答える。

「グット！」

[illegible]

僕は『村正』を『収納』して『童子切Mk-?』を上段で構える。

「行きますわよ!!」

「来い！！セシリア・オルコット…否、『青星の淑女』……！！」

セシリア・オルコットの『スターライトmk?』と『ブルー・ティ
アーズ』から同時にレーザーが放たれ、僕は上段に構えている『童
子切Mk-?』に、シールドエネルギーを一定量与え……

「鬼牙絶刀！！！！！」

「きやあああああ……！！！！！！！！！！」

『童子切Mk-?』を振り下ろすと、『童子切Mk-?』から斬撃が放たれ、セシリア・オルコットが放ったレーザーを斬り裂き、そのまま、セシリア・オルコットに直撃する。

「試合終了。勝者、博麗幸夜」

アナウンスが流れ、僕とセシリア・オルコットの試合は僕の勝利で終わった。

第六話く青い雫く（後書き）

幽&幸&悠「「紅 幸二のトークショー！」「」」

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします！！」

悠「それで作者、今回は何をするんだ？」

幽「今回は、前々回で出た、青騎士・青狼と幸夜が持つ魔導具について説明するぞ！」

幸「では、どうぞ！！」

魔戒剣銃【青牙^{セイロ}】：幸夜が使う魔戒剣で、状況に応じて接近戦・遠隔戦に切り替えることができる。

魔導火ライター：魔戒騎士が携行するライター。ライターには魔界の炎である【魔導火】が入ってる。

魔導火：魔戒騎士が持つ火で、指令書の解読　ホラー探知（憑依された人の瞳にかざすと魔導文字が浮かび上がる）　【烈火炎装】のための触媒　傷の治療などの用途があるが、魔導力の修業を受けた者しか扱うことはできず、常人が扱おうとすれば一瞬で焼き尽くされる。

ちなみに幸夜は、指令書の解読で火を使ったことはない。

青狼の鎧：幸夜が纏う、ソウルメタルで造られた鎧

頭上に魔戒剣銃で円を描き、その円の中心に向かって引き金を引く事で召喚が出来、纏う者に絶対の攻撃力と防御力を与える。しかし、鎧を召喚し纏う事ができるのは99.9秒だけで、それ以上纏うと鎧に喰われる。

鎧の造形は青色に輝く鎧と、狼を模ったようなフルフェイスのマスクで、どこか牙狼に似ている形になっている。

幸「です」

悠「なんか凄いな」

幸「そう?」

幽「さあ?」

悠「まあ、良いか…さて!今日のトークショーはここまで!」

幸「みなさん!」

幸&悠&幽「」「さようなら」「」「」

IS & デバイス設定（ネタバレ注意）

IS：ジェフティ

操縦者：鳴海悠二

待機状態：黒く輝く結晶の形を取ったペンダント

IS形態：スマートな外観で脚部が長く、カラーは黒を貴重としている

ジェフティは悠二が持っているノートパソコンに何故かISの設計図があり、悠二は暇つぶしに設計図にあった三機ISを造り、その造られた中のうちひとつが、ジェフティである。

固有武装は右腕に装着された実体剣『パドルブレード』、左腕に高出力エネルギーシールド、さらに背部のウイングから一気に15発の歪曲しながら敵を追尾する高威力レーザー『ホーミングショット』、背部に二基の展開式バーニアを装備しており機動性も高く、さらにインテリジェントデバイスの技術を応用して開発した独立型戦闘支援人工知能『ADA^{エイダ}』を搭載しており、いかなる状況でも柔軟に対応できる最強クラスのISの名を欲しいままにしている。ほか、ベクタートラップシステムを用いてさらに副兵装を呼び出し自在に使用することが出来る。

武装：パドルブレード、高出力エネルギーシールド、ホーミングショット

サブウェポン：『ベクターキャノン』大部隊殲滅及び拠点攻撃用の巨大な超高エネルギー砲で、メタトロンの圧縮空間能力を利用した空間破碎が可能で、威力はスターライトブレイカーの約30万倍。

『ガントレット』腕部から実体弾を発射する。

『コメット』ガード不可能エネルギー弾を三発放つ。対象に命中するまで一定時間飛び回るため、回避も難しい。

『フアランクス』大量の小型エネルギー弾を連射する。拡散させて広範囲に弾幕を張ったり、一点に収束させて攻撃することも可能。

『ハルバード』超強力な一点集中型のレーザーを放つ。

『マミー』全方位からの攻撃を防ぐ巨大な実体シールドを召喚する。その内部で機体を自己修復させることも出来る。

『ホーミングミサイル』追尾性の高いミサイルを一気に2〜20発放つ。

IS：ホルス

操縦者：博麗幸夜

待機状態：赤い鳥の翼を象ったペンダント

IS形態：ジェフティを赤と金に塗り替えたような感じで、背中に四枚の鳥の翼を象ったウィング型の機動兵装『ウィスプ』を持っている

ホルスは悠二が造った三機のうち最も後期に開発された機体

固有武装は日本刀型の電磁式の剣『村正』とジェフティと同型のホーミングショット、天下五刀の一本童子切りを元に作られIS用近接ブレードで、シールドエネルギーを一定量与えると斬撃を飛ばし、相手を切り裂く「鬼牙絶刀」が使える『童子切Mk-?』、さらに世界一つを破壊出来るほどの威力を持つ砲撃『虚無・ウー・』で、もちろんベクタートラップシステムやゼロシフトも使用可能で、幸夜の癖に合わせてチューンナップされているため三機の中では最も性能が高いが、唯一人工知能が搭載されていない。

武装：村正、ホーミングショット、虚無・ウー・、童子切Mk-?

サブウェポン：『ベクターキャノン』大部隊殲滅及び拠点攻撃用の巨大な超高エネルギー砲で、メタトロンの圧縮空間能力を利用した

空間破碎が可能で、威力はスターライトブレイカーの約30万倍。

『ガントレット』腕部から実体弾を発射する。

『コメット』ガード不可能エネルギー弾を三発放つ。対象に命中するまで一定時間飛び回るため、回避も難しい。

『フランクス』大量の小型エネルギー弾を連射する。拡散させて広範囲に弾幕を張ったり、一点に収束させて攻撃することも可能。

『ハルバード』超強力な一点集中型のレーザーを放つ。

『マミー』全方位からの攻撃を防ぐ巨大な実体シールドを召喚する。その内部で機体を自己修復させることも出来る。

『ホーミングミサイル』追尾性の高いミサイルを一気に2〜20発放つ。

デバイス設定

所有者：博麗幸夜

名前：エターナル・ゼロ

愛称：エターナル

AI：女性

種類：インテリジェントデバイス／ユニゾンデバイス

待機時：青い宝石が付いた指輪

使用時：モード・ツヴァイ【干将・莫邪の刀身を細くして、両方の柄に鎖を繋げた双剣に変わる】

モード・ゲヴェーア【銀色で蒼い線が入っている二丁拳銃に変わる】

バリアジャケット：セイバーオルターの鎧ドレス

エターナルは、幸夜が魔術・魔法を使うときの触媒にもなり、ホラーなどの生物の気配を感知できるシステムがある。性格は結構明るい、冷静さもある。幸夜の事を「マスター」と呼ぶ。ちなみに、エターナルは人間の姿になり、ユニゾンデバイスとしても使用できる。

所有者：鳴海悠二

名前：トライアングルハーツ

愛称：ハーツ

A I：女性

種類：インテリジェントデバイス／ユニゾンデバイス

待機時：スプレー缶で、松岡SHU造ってやって起動

使用時：ブラストフォーム「レイハのエクシードモードと同じ槍型で、刃は赤」

マツオカフォーム【日本刀型で、フェイト以上の高速戦闘を得意とする】

バリアジャケット：赤い着物に灰色の袴姿

トライアングルハーツは、悠二が魔術・魔法を使うときの触媒にもなり、生物の気配を感知できるシステムがある。性格は明るく、ハーツがボケ、エターナルがツツコミと言う関係が成り立っている。悠二の事を「マイスター」と呼ぶ。ちなみに、ハーツも人間の姿になり、ユニゾンデバイスとしても使用できる。

第七話、生徒会長、（前書き）

後書きキャラ崩壊、激しいです。

第七話　生徒会長

突然だが、僕と悠二は生徒会室の前にいる。

何故、こんな所にいるのかというと…

僕と金髪ドリルの試合が終わった後、僕は一夏に色々聞かれたが、ある程度はぐらかした状態で話を終え、悠二と一緒に部屋に帰ろうとすると悠二が、【山行こうぜ】的なテンションで【生徒会長、殺^やりに行こうぜ】と言ってきたからだ。

この言葉を聞いて、『^{オーバーキルバレード}大量殺戮祭』を出したのはしょうがないと思う……だって、殺^やるという言葉は僕の言葉なのにいいいいいいい……！！！！！！

………すみません話がそれました。

「失礼します」

と、僕が色々考えているうちに悠二が生徒会室に入って行った。おっと、僕も入らなきゃ………まあ、今回は僕が闘^{たた}うわけじゃないし、悠二vs生徒会長と言う歌劇^{たか}を楽しむとするかな…

side out

side悠二

「失礼します」

俺は生徒会室の中に入り、目当ての人物を探す……お、いたいた♪

俺の目当てである人物で、この学校の【生徒会長】である更識^{さらしき}楯^{たて}無^{なし}が、驚いた様子で俺達の方を見ていた。

「鳴海悠二くん？と博麗幸夜くん？」

「初めまして、生徒会長の更識楯無さん。それとよく覚えていましたね」

俺は深く腰を折るように礼をしながら言う。

「珍しい男子生徒だからね」

「そりゃそうですね」

楯無の言葉に幸夜が肯定するように言う。すると……

「あゝナルナルとハクハクだゝ」

む、この独特な雰囲気を持つしゃべり方と、幸夜のあだ名が、身した時に【きもけーね】と言う愛称で呼ばれる慧音の種族である【ハクタク】となんか似ているような言い方をする人物は！！

「おひさゝのほほんさん」

「やあゝハクハクゝ」

クラスメイトである布仏^{のほとけ}本音^{ほんね}が幸夜とハイタッチしていた。まあ…それはさておき…

「生徒会長さん相手してもらえますか？」

「ええ良いわよ。」

「ありがとうございます。」

俺は笑顔でお礼を言い…

グシャ！

生徒会長が転がるように椅子から降りると、椅子が木っ端みじんに破壊される。

「普通、笑顔でお礼を言いながら攻撃する？しかも殺気が少ししかなかったわよ。」

「そうですか…」

俺は生徒会長を攻撃する時に使った、剣のように見え、ハンマーのようにも見え、太い釘にも見え、鎖で柄と繋がれている歪な武器【スーサイドタルファンク地裂灰燼】を手元に戻す。

「ですが、こんなことで驚かれてちゃいけませんよ生徒会長？俺の後ろにいる博麗幸夜は俺よりも毒気のない笑顔で、殺気も出さずに…そして、息をするように人を殺しますからね…」

「…ホント、凄いわね」

さて、この一撃で仕留められなかったし…

「それでは生徒会長さん、ISで勝負しましょうか」

「ええ良いわ」

俺と生徒会長はアリーナに向かった。

~~~~~

## 第五アリーナ

「行くぜ、ジエフティ」

「サーイエッサー」

ISの待機状態から声が聞こえた瞬間、俺の体にスマートな外観で脚部が長く、黒色をメインとしているISが装着される。

生徒会長の方を見ると、生徒会長は専用機『霧纏の淑女』ステリアス・レイディを装着していた。

俺は実体剣『パドルブレード』、生徒会長は蛇腹剣『ラスティ・ネイル』を構える。

「それじゃー」

「れでいーごー!」

幸夜とのほんさんの開始の合図と共に、俺は様子見の為、サブウエポンである『ガントレット』から実体弾を腕部から発射する。

生徒会長はその全ての弾を蛇腹剣『ラスティ・ネイル』で弾くか、そのまま機体を動かし避けている…まあ、予想通りか？

「行くわよ!」

「フッ!」

俺の『パドルブレード』と生徒会長の『ラスティ・ネイル』がぶつかり合う。

「こんなに接近して来て良いのか、生徒会長さん？」

「ええ、大丈夫よ」

「そうか…フン！」

「きゃ?!」

俺は生徒会長に蹴りを入れ、生徒会長との距離を離す。

「いたゞ普通IS戦で蹴りを使う？」

「俺、非常識の塊なんで」

「あら、そう」

俺は『パドルブレード』を構えた状態で、生徒会長を警戒するが、生徒会長には『ラスティー・ネイル』で攻撃する意思が見えない…何故だ？

「マスター、マスター周辺の空間に異常が」

「何っ?!」

俺のISに搭載されている独立型戦闘支援人工知能『エイダADA』から警告が鳴り、俺はそこから脱出しようとするが……

「クリア・パッション！」

俺の周りの空間の温度が一気に上昇し、衝撃や熱が俺に襲いかかってくる…だが

「シールドエネルギーがあまり減ってない!？」

「あぶねゝ助かったぜ『A D A<sup>エイダ</sup>』」

「いえいえ、これは当然の行動ですよ」

俺は『A D A<sup>エイダ</sup>』の冷静な判断のおかげ、さっきの攻撃をあまりダメージを受けずにやり過ごすことが出来た。

「今度は俺のターンだ!!」

俺の背部のウィングから一気に15発の歪曲しながら敵を追尾する高威力レーザー『ホーミングショット』を発射し、生徒会長は『ホーミングショット』を水のヴェールで防御する。

「甘い、それはフェイクだ」

「きゃ?!」

俺は生徒会長が攻撃を防いでいる間に背後に忍び寄り『パドルブレード』で斬りつけて、シールドエネルギーを減らし、後ろに飛ぶことで、距離を開ける。

「さあ来いよ。生徒会長」

人差し指をクイクイと曲げて、挑発する。

「上等!」

生徒会長は水を螺旋状に纏ったランス『蒼流旋』を『展開』する。

「ハア！」

「チッ！」

『蒼流旋』の攻撃を『パドルブレード』で受け止めようとするのを止め、左腕の『高出力エネルギーシールド』で防ぐ

「『A D A』！！」

「フアランクスを発動します」

ISから大量の小型エネルギー弾を連射し、それを全て拡散させて広範囲に弾幕を張ることで、生徒会長と俺との距離を離す。

「『A D A』コメントだ！」

「了解」

俺はエネルギー弾を三発放つ。

「これぐらい！！」

生徒会長が水のヴェールで防ごうとするが…

「そんな？！きゃああああ！！！！！！！！」

俺が放った三つのエネルギー弾は水のヴェールを貫通し、生徒会長に直撃する。

流石この学校の生徒会長だな…ほとんどのサブウェポンを使っても倒れないのか…なら！

「生徒会長これでも喰らつてな！！『ハルバード』！！！！！！」

「きやあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺は超強力な一点集中型のレーザーを放ち、レーザーは生徒会長に直撃する

「勝者、ナルナル」

のほほんさんの終了の合図と共に、シールドエネルギーが切れたと生徒会長のISは解除され、そのまま落下していく…って？！

「『<sup>エイダ</sup>ADA』！！」

<sup>イグニッション・ブースト</sup>  
「瞬時加速」

俺は『<sup>イグニッション・ブースト</sup>瞬時加速』で加速し、地面に直撃する寸前で生徒会長を受け止める。

「大丈夫か？」

念の為聞いておかないとな…うん？どうして、生徒会長の顔が赤いんだ？

「だ、大丈夫よ／／／／」

「そうか、それは良かった」

「それじゃあ後はよろしくね、新生徒会長さん」

生徒会長がそんなことを言う…あ、勝ったら生徒会長なんだっけ？

「要らねえよ。生徒会長の席なんて」

「だったらなんで挑んだの!？」

俺の言葉に生徒会長が驚いた顔で聞いてくる。

「まあ、ある程度のお願いを聞いて欲しいだけですよ」

さて………後は、何故かケータイ電話を持ってニヤニヤしている幸夜をやるだけか…

｝side out｝

｝side 幸夜｝

悠二が生徒会長を倒した翌朝のSHR……あ、ちなみに昨日悠二が僕に対して、O H A N A S H I ！そうになったから、僕は正直にケータイを見せ、それを見た悠二はorz状態になった。理由は…

宛先：永琳さん

件名：奥さん悠二の愛の逃避行ですよ。

ファイル添付：悠二が顔が真っ赤な生徒会長をお姫様だっこしている写真

本文：悠二君が浮気しました。

のメールを見たからだ。

そして、その直後…

宛先：幸夜君

件名：今回の件について

ファイル添付：永琳さんが怪しい薬を持ち、その後ろで鈴仙<sup>れいせん</sup>が拘束され暴れている写真

本文：悠二のせいで哀れな犠牲者が出ました。それと悠二、帰って

きたら 自主規制 するわよ……

この文と写真を見た瞬間、僕と悠二は鈴仙<sup>れいせん</sup>に黙祷した。

そして悠二は、永琳に 自主規制 される？悠二それは嫌だと思えるから嫌な気分になるんだ。逆に考えるんだ、 自主規制 されても良いんだ、と考えるんだ。……と、言っていた……ごめん悠二

「では、一年一組代表は織斑一夏<sup>いちか</sup>くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

と、こんなことを考えているうちに、山田先生がクラス代表を発表していた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？普通、昨日勝った幸夜が代表になるんじゃないんですか？」

「それは……」

「それはわたくし（僕）が辞退したから。（ですわ！）」

山田先生の言葉を遮り、僕とセシリア・オルコットの声が重なる。

そしてセシリア・オルコットの物凄く長い喋り……てか、セシリア・オルコットと篤さんの反応を見て分かったが、二人は一夏に恋をし

ていて、一夏はそれに気づいていないことが分かった。ううん、青春だね。

あ、ちなみに僕は、「敗者は勝者に従え」と言っておいた。そして  
ら一夏が、orz状態になった。

「クラス代表は織斑一夏、依存はないな。」

「はい！」

こうして、SHRは終わったのであった。

## 第七話 生徒会長 (後書き)

幽&幸&悠「」「紅 幸二のトークショー!!」「」

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー! 司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と、」

悠「鳴海悠二でお送りします!!」

幽「悠二…ケツ!」

幸「ケツ!」

悠「いきなり何だ?!…よし、幸夜そのケータイをこちらに渡してもらおうか?」

幸「チツ!」

幽「悠二、いきなりフラグ立てたな」

悠「立ててねえよ!! それより幸夜、お前のせいで俺、幻想郷から帰ったら大変なことになるぞ!!」

???「大変なことって?」

悠「それは永琳に 自主規制 されたり、三日三晩 自主規制 だったり、薬を飲まされ 自主規制 だったr…(ガシッ!)…へ?」

「???「久しぶりね。ゆ・う・じ」」

悠「え、永琳……どうしてここに？しかもまだ本編には名前しか出てないのに……」

永「それはね」

幽「作者権限だ」

悠「作者アアアアア……！！！！！！！！！！」

永「それじゃあ行きましょう。悠二……／／／／／／（ポツ）」

悠「あれ？普通に可愛いと思うのに恐怖を感じるのはなぜ？あれ、永琳さん？どうして肉食獣の目をしてるんですか？涎をたらさないで……いい、イヤアアアアア……！！！！！！！！！！」

悠二はログアウトしました。

幸「……悠二……ところで作者、これからも後書きに東方キャラ出すの？」

幽「おう、ISキャラもだぜ！まあ、ちよくちよくだな」

幸「そうか………さて！今日のトークショーはここまで……！」

幽「みなさん！」

幸＆幽「……さようなら」「……」



第蜂話ゝ中国人ゝ（前書き）

誤字・脱字あるかもしれません。

## 第蜂話〜中国人〜

現在は四月下旬、僕達がIS学園に来て結構な時間が経ち、僕達のクラスは飛行訓練の為にアリーナに来て整列していた。目の前にはジャージ姿の織斑先生が立っている。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。博麗、鳴海、織斑、オルコット、ために飛んでみる」

僕はいつものようにペンダントを掴み、意識を集中させる。

「（行こう、ホルス）」

僕の体にホルスが装着され、悠二、セシリア、一夏も既にISを装着していた。ちなみに、僕はセシリア・オルコットをセシリアと呼ぶようになったかと言うと、あっちが僕達に対してやってきた態度を謝り、自分のことはセシリアと呼んでくれと言ってきたからだ。あ、僕もちゃんと謝ったからね。

「よし、飛べ」

織斑先生の合図と共に僕と悠二、セシリア、一夏は同時に飛ぶ。ISの飛ぶときのイメージは『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』らしいが、僕のイメージは『羽を生やして空を飛ぶイメージ』だ。…実際、羽根生やせるし、僕…

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

一夏が織斑先生にお叱りを受ける。織斑先生は身内に厳しいのかな？

そして、セシリアが一夏と楽しそうに喋る。

「（なあなあ、幸夜）」

「（なあに？悠二）」

「（青春だね）」

「（そうだね）」

悠二の言葉に僕も同意する。ちなみにこの会話はISの記録に残らない念話で行っています。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く下りてこい！」

と、そんな事をしていると地上にいる篤さんが山田先生のマイクを奪って叫ぶ……何をやってるんだ篤さん？！織斑先生の出席簿の生贄なるだけじゃないか！！ちなみに、この望遠鏡並みの視力はハイパーセンサーによる補正だ。……まあ、僕と悠二の場合はISのハイパーセンサーの補正無しでもこれ位は余裕で見えるけどね……

「ちなみに、これでも機能制限がかかってるんでしてよ。元々ISは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

さすが優等生。よく勉強をしてるなあ。

「織斑、オルコット、博麗、鳴海、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上十センチだ」

「了解です。ではみなさん、お先に」

そう言つて、セシリアは地上に向かつて急降下していき、完全停止も難なく成功する。一夏の方を見るとセシリアのことを感心しながら見ている。

「それじゃあ、俺も行くわ」

「僕も」

僕と悠二も急降下していく。ちなみにこの時の僕のイメージは『ただ落下していくイメージ』だ…てか、これしか思いつかん。悠二も同じだろう。

そして、地上10cmに来た所で『人形が糸で引つ張られるイメージ』で急停止する。ふと、横を見ると悠二も余裕で完全停止をしていた。

「いつてえ・・・」

「さすがだな。次、織斑」

織斑先生の合図と共に一夏が急降下してくる…そして

ズドオオオオン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

それは専門用語で墜落と言つ…

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「すみません」

織斑先生の厳しい言葉に一夏は謝る。

そして一夏を巡って篤さんとセシリアが火花を散らして揉めていたが、織斑先生の一喝で収まる。

「織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はいっ」

一夏は返事をして突き出した右腕を左手で握る

そして・・・光が手の中から放出され、像を結び『ゆきひらがた雪片式型』が一夏の手の中出现する。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

織斑先生やっぱり身内に厳しいなあ

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏のように光の

奔流を放出することではなく、一瞬爆発的に光り、それだけでその手には狙撃銃『スターライトmk?』が握られ、しかもすでに銃器にマガジンが接続されており、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。この間わずか1秒足らずだ…しかし

「さすがだな、代表候補生。・・・ただし、そのポーズは止める。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

織斑先生の言う通りだ、銃とは標準を合せ引き金を引く…この動作の時間が長いのは致命的だ。だから、銃を出す時は銃口を相手に向け標準を合せておけば、後は引き金を引くだけだ。そこら辺が甘いな、代表候補生は…

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な・・・」

「直せ。いいな」

「……はい」

織斑先生の言葉に反論する前に黙るセシリア

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

いきなり振られてびっくりするセシリア・・・絶対、頭の中で文句を言っていたな。

銃器を光の粒子に変換し『格納』、新たに近接用の武装を『展開』させようとする…しかし、光の粒子はなかなか像を結ぼうとはしない

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐですっ。……………ああ、もうっ！『インターセプター』！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に呼ぶ。それにより、イメージがまとまり、光は武器となつて展開される。

たしか……これは教科書に載ってる『初心者用』の手段…代表候補生のセシリアにはかなり屈辱的だろうな…

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらつつもりか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦では初心者に簡単に懐に入らせていたように見えたのだが？…しかも博麗との対戦では簡単に懐にはいられ、遠距離でも負けたように見えたのは気のせいかな？」

「あ、あれは、その……」

「ごによごによと齒切れが悪そうなセシリアを一夏が眺める。あ、一夏が睨まれた……文句でも言われてるんだろっ…」

すると、僕の方にもセシリアからの個人間秘密通信が来る。

フライベート・チャネル

『あなたもですわよ!』

『なんでさ』

『あんな戦い方。非常識ですわ!』

『そんなこと言われてもなあ』

僕は非常識の塊なんだけど…そして悠二、笑うな…

「博麗、お前達も武装を展開しろ」

「はい」

僕は『村正』と『童子切Mk-?』を『展開』する。

「0.3秒…さすがだな」

「ありがとうございます」

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

「は、はい」

こうして授業は終わった。………ちなみに、僕と悠二が手伝うと言ったら。ものすごく喜ばれた。

side out

side???

「ふうん・・・ここがそうなんだ・・・」

夜、私はIS学園の正面ゲート前に立っていた

「えーっと・・・受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出すくしゃくしゃになってるけど・・・まあ、いいや。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれはどこにあんのよ」  
文句を言っても紙は返事しない。私は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。……また中でくしゃって音が聞こえたけど気にしない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

「たたく・・・出迎えないとは聞いてたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に15歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？」

私は文句を言いながら敷地内を歩き回る…はあ、誰かいらないかな？生徒とか、先生とか、とりあえず受付の所まで案内できる人…

時刻は八時過ぎ。どの校舎も灯りが落ちているし、当然生徒は寮に  
いる時間だ

あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな…

一瞬、「それは名案！」と思ったんだけど、あの『あなたの街の電話帳』三冊分に匹敵する学園内重要規約書を思い出して、やめる。

まだ、転入の手続きが終わってないのに学園内でISを起動させたら、事である。最悪、外交問題にも発展する。それだけは本当にやめてくれ、と何回も懇願していた政府高官の情けない顔を思い出して、私の気分はちょっと晴れる。

ふっふーん。まあねー、私は重要人物だもんねー。自重しないとねー

正直言つて自分の倍以上も歳のある大人がへこへこ頭を下げるのは、  
ちょっと気分がいい。

昔から、『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いな  
私にとって、今の世の中は非常に居心地が良かった。

男の腕力は兎戯、女のISこそ正義。それもまた気分がいい。私は  
かつて、『男っていうだけで偉そうにしている子供』が大嫌いな子  
供だった

…でも、アイツは違ったなあ。

とある男子のことを思いそうとすると……

「君、こんなところで何してるの?」

ちよつと……今アイツのこと思い出そうとしてんのに邪魔すんのは誰よ!

不機嫌そうに振り向くと、薄い金色の髪で、その髪は銀と黒のリボンで結んでポニーテールにしている、眼の色が金と翠のオッドアイで、IS学園の制服を改造して、コートの様な物を着ている男子? が立っていた……男子生徒の制服を着てるけど……こいつ本当に男子?

＼Side 幸夜＼

「君……こんなところで何してるの?」

僕は酒と煙草が欲しくなり、外に買いに行こうとして気配遮断を使つて歩いていると、見慣れない女子がいたので、声をかけてみた。

すると、不機嫌そうに振り返り……次に驚きの表情で僕を見る。

「あんた……誰?」

「僕は1年1組の博麗幸夜……君は?」

「私は……『だから……でだな……』……あ……」

女子がアリーナから聞こえてきた声に反応し、走り出す。

「いきなりどうs「ちょっと黙ってて」…はい」

このタイプの人間には従った方がよさそうだ…

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

む？この声は一夏…女子は足を止めて何か呟いてる。そして…

「いち……」

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいつて感じ』って」

「……くいつて感じだ」

「だからそれがわからないって言って……おい、待てって箒！」

それを見て僕は女子の方を見ると…な、何だ？！物凄く怒っているぞ。

「……総合事務受付ってどこ？」

「……こつちだ」

アリーナの後ろの本校舎に案内し、灯りのついてる総合事務受付まで女子を連れて行く。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ISS学園へようこそ、ファン・リンイン 鳳鈴音さん」

女子の名前は、鳳鈴音か……名前からして中国人か？

「博麗君もありがとうございますね」

「いえいえ」

事務員さんにとりあえず笑みを浮かべ、その後鳳さんを見ると……  
…まだ不機嫌そうに唇を尖らせている。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？1組よ。博麗君と同じクラスね。鳳さんは2組だから、お隣ね。あ、そうそう、あの子1組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

…いつの間に此处まで情報が来てるんだ？

「2組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

……何故だろう、この後どうなるのか分かるのは僕の気のせいだ

ろっ…

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

凰鈴音の笑顔にはばっちり血管マークがついていた…

一夏…ドンマイ



幸「……………」

幽「幸夜、何だった？」

幸「ま、マチガエデンワッタオ」

幽「そうか？あと、語尾がおかしいぞ？」

幸「ソナナコトナイオ」

幽「なら、良いけど。」

幸「さて！今日のトークショーはここまで！！」

幽「みなさん！」

幸&幽「さようなら」「」

第九話く代表就任パーティーく（前書き）

今回は短いです。

## 第九話　代表就任パーティー

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

ぱん、ぱんぱーんとクラツカーの音が鳴り、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』が始まる。一夏の方を見ると何故こうなった？と言う表情をし…………幸夜は…物凄い笑顔…詳しく言うなら、瞳をキラキラと輝かせ、満面の笑顔で料理を喰いまくっている…おい、幸夜の周りにいる女子、鼻血を出すな、興奮するな…霊夢が攻撃してくるぞ…………それにしても、夕飯を喰ったのに、幸夜は本当に喰うな…………だから『腹ぺこ王二号』なんて呼ばる…

「危なっ？！」

俺は飛んできたナイフを紙一重で避けて、投げられた方を見ると…

『誰が腹ぺこ王二号だっ？』と幸夜が眼で伝えてくる…分かった、もう言わないから。ケータイをチラチラ見せて俺を脅すな！！また、永琳に何か言うつもりか？！

「いやゝ、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねゝ。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

…あれ？今、相槌を打ってる子は二組のはずじゃ…俺、疲れたのかな？明らかに30人以上いるように見えるんだけど？…なんでクラスの集まりでクラスの人数こえてんの？

「まあ…いつか」

こう言うことは人数が多いほど、楽しいしな。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君、鳴海悠二君、博麗幸夜君に特別インタビューをしに来ました〜！」

おお〜と一同盛り上がる…適当に答えるか。

「あ、私は2年のまゆみかおろこ黛薫子。よろしくね。新聞部部长やってます。はいこれ名刺」

名刺を受け取る…画数が多いいな…書くのめんどいだろうな。

「ではでは織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

さて、一夏はなんて答える？

「えーと…まあ…なんというか…がんばります」

普通のコメントだな。

「え〜、もうちょっといいコメントちょうだいよ。俺に触ると火

傷するぜ、とか」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的!」

そうか? まあ、俺は松岡修造派だな!!

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

…摸造するんかい?!

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そう言いつつも満更でもない表情だな…

「コホン、ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかと言つと、それは……」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい!」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからつてことにしよう」

「なっ、な、ななっ……!?!?」

おいおい、黛さんそんなこと言ったらさすがの一夏でも気づいちゃうだろ？

「何を馬鹿のことを」

…訂正、一夏は超鈍感だ。

「じゃ、鳴海悠二君、博麗幸夜君、なにかコメントちょーだい」

コメントかゝなんて言おうか？

「（悠二、僕が先に言おうか？）」

「（悪いな）」

「（べつに良いつて）」

俺は幸夜にお礼を言う

「それじゃ、僕から」

「それじゃ、どうぞ！」

「僕の敵になる奴は、我が武器の露と消えてください」

おい、それセイバーのセリフパクってね？

「良いね、良いね。そう言うコメントを待っていたんだよ！」

それで良いのかよ?!

「それじゃー鳴海君…どうぞー!」

「え?…もつと熱くなれよ…!!熱い血燃やしてけよ…!!人間熱くなつたときがホントの自分に出会えるんだ!」

良いよな?松岡修造…良いよな?!

「鳴海君も良いコメントだよ!」

よっしゃアアアアア!…!!…!!…!!勝ったよ!高倉健に勝ったよ!…!!…!!

「はい、三人ともありがとう」

ふう…なんとか乗り切ったぜ…幸夜、お前どんだけ食ったよ!!

「ほら、幸夜。もう行くぞ!」

「え?!まつてよ、悠二!!僕はまだ食べてるんだよ!!」

「あとどれだけ食うんだ?」

「デザート30人分!」

……………ブチッ!

「いくぞ」

「え？待ってよ！！待って！！待ってよおおおお！！！！！！！！！！」

俺は涙目になっている幸夜の制服の襟を引っ張りパーティーから抜け出す…途中、女子生徒が鼻血を大量に出していたが…俺は気にしない！！

## 第九話く代表就任パーティーく（後書き）

幽&幸&悠「くく紅 幸二のトークショー!!」くく

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー!司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と」

悠「鳴海…悠二でお送りします」

幽「悠二…大丈夫か?」

幸「大丈夫か?」

悠「大丈夫に…見えるか?」

幽「体の至る所が干からびてるように見えるけど…」

幸「うん!大丈夫だ!!」

悠&幽「何処が?!」く

幸「え、僕のポケットの中に入ってるビスケットが砕けてないかどうかだけ?」

ブチッ!

悠「おりゃ!!」

ブン！↑悠二が幸夜のバスケットを奪って投げる音

幸「僕のバスケットがああああああ！！！！！！！！！！」

ピュン！！↑幸夜がバスケットに向かって走る音

悠「ふう〜これでスッキリしたぜ」

幽「…悠二、大丈夫なのか？」

悠「何が？」

幸「幸夜の食べ物を投げたけど…」

悠「……………（大汗）」

ピュン！！↑悠二が幸夜に向かって走る音

悠「幸夜！！バスケットならいくらでも買ってあげるから、永琳は呼ばないでくれええええええええええ！！！！！！！！！！」

幽「…二人とも行っちゃった…」

幽「しかたがないか…今日のトークショーはここまで！！みなさん！！」

幽「さようなら」

第拾話、セカンド幼馴染、（前書き）

今回も誤字・脱字が多いかもしれません

## 第拾話　セカンド幼馴染

パーティーが終わった次の日…

「おはよう」

「おはよう、博麗君、鳴海君」

「織斑君達、転校生の話聞いた？」

「いや・・・？」

転校生？…ファン・リンイン 鳳鈴音のことか？

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

今日もセシリアが腰に手を当てたポーズをとる…髪型が金髪ドリルの人は全員似合うのだろうか？

「どんなやつなんだろうな」

一夏の奴、気になってるようだな…ファン・リンイン 鳳鈴音の方は一夏のことを知っていたそうだが…教えた方が良さだろうか？

「む・・・気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……」

不機嫌そうな篤さん…ふむ、好きな異性が自分以外の人間に興味が行くことはつまらないらしいな…

「今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。せ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

あれ？僕と悠二がスルーされてるのは気のせい？

「幸夜と悠二もいるだろ」

「う…そうですね…」

少し残念そうなセシリア…なんか、すまん。

「一夏、セシリア達と練習して来いよ。俺と幸夜の戦い方だと、お前に合わないからな」

「そうそう」

悠二の言葉を肯定するように僕は頷く。

「ん…まあ、そういうなら」

一夏の言葉を聞きセシリアが満面の笑顔で僕達の方を見る。いやゝ人の恋を応援することは面白いなゝ

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする。」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

一夏を女子が囲んで色々言う…一夏、頑張れ。

「織斑君、頑張つてねー」

「フリーパスのためにもね！」

フリーパス…そう言えば優勝した代表の組が貰えるんだっけ？

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

一夏は「おう」と答える。

「……………その情報、古いよ」

む、この声は…一夏の方を見ると、聞き覚えがありそんな表情をしている。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

ファン・リンイン  
鳳鈴音が、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた…やっべ、めっちゃ似合わない…

「鈴・・・？お前、鈴か！」

一夏の反応から考えると、やはり知り合いだったか

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

…ホント似合わないな

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ・・・！！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

一夏も同じことを思っていたらしい…一夏の言葉で砕けた口調に戻る。すると鳳鈴音が此方を向き…  
ファン・リンイン

「そういえば・・・あんたもこのクラスだったわね、この前はありがと」

「べつに良さ」

「それじゃあね」

そう言うなり、鳳鈴音は自分のクラスに戻って行った…

くくく

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みに入るなり、篝さんとセシリアが一夏にそう言った。ちなみに二人は授業中、山田先生に注意五回、織斑先生に三回叩かれた。それほど、凰鈴音の登場は衝撃だったのだろうか？

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあ、お前がそう言うのなら、いいだろう」

「ん？じゃあちょうどいいし、俺も行こうかな。幸夜とセシリアも行こうぜ」

「うん」

「そうですね。一緒にさせていただこうかしら？」

その他のクラスメイトが数名付いてきて、僕達はそろそろと学食に移動した。

ちなみに一夏は日替わりランチ、篝さんはきつねうどん、セシリア

は洋食ランチ、悠二はナポリタン、僕はラーメン大盛り十人分、焼き餃子十五人分、杏仁豆腐十人分だ。これを見た一夏達に『そんなに喰えるのか？』『太らないのか？』と聞かれ、『普通に喰える、これでも抑えてる方で、体重は全然増えない。むしろ喰ってないと減る』と言ったら。篤さん、セシリアを含む女子たちに羨望の瞳で見られた……………何故？

「待ってたわよ、一夏……って、ええええええええ？！！！！！」

凰鈴音がその手にラーメンを持って一夏の名前を言った瞬間、僕も持つご飯の量に驚いていた。……皆、どうしてこんなにも過剰反応するんだろ？

「はあ・・・まあとりあえずそこをどいてくれ、食券が買えないし、何より通行の邪魔だ」

「わ、わかつてるわよ！」

「早く食べないと伸びるんじゃないか？」

「わ、分かってるわよ！つーかあんた誰よ！」

そう言えば悠二、自己紹介してなかった…

「俺は鳴海悠二って言うんだ。よろしく！」

「よ、よろしく．．．って、アンタを待ってたのよ一夏！もつと早く来なさいよ！」

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるが、元気だったか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ怪我病氣しなさいよ」

物凄い挨拶の仕方だな…

「んんっ！」

「一夏さん、注文の品、出てきてましてよ？」

「お、向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

篝さんとセシリアさんの言葉で、一夏が見つけた席に皆で座り、食べ始める。

「それで一夏よ、つもる話もあるかもしれないけど、僕たちに凰鈴音との関係を教えてくれない？」

「そつだぞ一夏。それとも、まさか付き合っているのか？」

周りを見てみると、女子の人達も興味があるのか、聞き耳をたてていた。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ・・・」

「そつだぞ。何でそういう話になるかな。鈴とはただの幼馴染だ」

あゝ、センカンド幼馴染というものが

「幼馴染・・・？」

「あー、えーっとだな・・・。箒が転校したのが小四の終わりだろ？ で、鈴が転入してきたのが小5の頭。で、中二の時に国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな」

一夏の幼馴染は二人かゝ僕と一緒にだな！！まあ、僕の方の幼馴染は、二人とも仲が悪く会ったたびに殺し合ってるけど……はあゝもう少し仲良くして欲しいよ。

「で、こつちが箒。前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

「ふうん。そうなんだ」

あれ？二人の間に火花が散ってるのは気のせいかな？まあ、とりあえず……

「ごちそうさま」

「あ、相変わらず速いな」

僕はご飯を食べ終わり、熱い緑茶をゆっくり飲む。ふうゝ至福の時だね

「あ、あんた…凄いわね」

「これぐらい、普通だぞ。 凰鈴音？」

「そ、そう…あ、それって、私は鈴でいいわ。」

「そうか？なら僕のことは幸夜で良いよ」

ふと横を見ると悠二がニヤニヤしていた…何故？

「へ…あの幸夜が、霊夢以外の女性に呼び捨てにすることすぐに了承するとわね」

「何かおかしいか？」

「それって、浮気か？」

この悠二と悠二が取りだしたケータイを見た瞬間、僕の行動は速かった…

「セイツー!!」

「チツ！」

近くにあった食事前のナイフで悠二のケータイを切断、悠二にもう一本投擲するが、悠二はそれをフォークで防ぎ、バックステップで僕との距離を離す。

一夏達の表情は、一体何が？と言う表情だ。

「悠二、一体何をするつもりだったのかな？」

「フツ、今まで受けていた憎しみをお前にぶつけようとしたただだ

…」

「そう………それじゃあ、戦争を、しましょう」

僕の制服の袖の中から大量の文房具が出てくる。

何処からか『四次元ポケット?!』と聞こえてきたが…無視だ。

「小便はすませたか? 神様にお祈りは? 部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK?」

悠二の手にはフォークとナイフが指の間に一本ずつ挿んである。…何処からか『執事?!』と聞こえてきたがこれも無視……

僕と悠二は暫く睨みあい………そして

「「まあ、冗談は此処までに使用か!」」

がたたっ!!!!!!!!!!

音が聞こえた方を見ると、一夏達や他の女子たちがずっとこけていた…何故?

「おいおい、みんな如何したんだ? そんなにずっとこけて…バナナの皮でも踏んだか?」

「「「「「「「「「「そんなわけあるか!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」」」」

おゝ、ほぼ全員のツッコミ…凄いな

そのあと、一夏に『霊夢って誰だ？』って言われたので、『僕の奥s…ゲフンゲフン…僕の恋人』と良い、悠二にもいることを言ったら、周りにいた女子たちが『神は死んだ!!』、『二度死んだ!!』と叫んでいた……あの〱僕、一応神様なんですが……

〱〱〱〱〱

「はぁ……疲れた」

今日の授業も終わり、僕は整備室に来ていた。

普段は悠二がホルスの整備をしてくれているんだが、やっぱり自分が使う機体だ、自分で整備したい。

「（マスター？マスター？）」

「（ああ、分かってるよ。後でエターナルもフルメンテしてあげるから）」

「（ありがとうございますっ）」

僕はエターナルと念話で会話しながら、ホルスを整備していく。

「…損傷は見られないし、機動の問題も無し…よし！」

整備し終えたホルスを待機状態にし、出て行こうとすると……

「……各駆動部の反応が悪い。どうして……?」

キーボードの様なものを打ちながら空中ディスプレイを見ている少女がいた……

何をしてるのかと思い、気配遮断を使ってその子に近づくと、どうやらこの子はISを作っているらしい。少し興味が湧く……

僕は気配遮断を解き……

「こんばんは」

「わひゃ?!」

よほど集中していたのか、僕の声に驚いた彼女からは奇妙な声が聞こえた。

「……あなた……誰?」

心なしか睨まれてる気がするが……気のせいかな?

「僕は博麗幸夜」

「そう……あなたが……」

「それでキミは?」

「更識……簪」

おお、シンプルな自己紹介だ。

「それで……何の用？」

「何の用って言われてもな」

「…用が無いなら…帰って」

更識さんの言葉に僕は少し慌てながらも、さっきまで考えていた言葉を言う

「キミ、強くなりたいかい？」

「side out」

「side 簪」

「キミ、強くなりたいかい？」

目の前にいる博麗幸夜に言われ思考が一瞬止まる…如何いうこと？

「それって…如何いうこと？」

「更識……楯無」

「ッ！」

彼の口から出た名前に体が強張る……………更識楯無…優秀すぎる私の姉…

「あなたは…………楯無…姉さんの差し金できたの？」

少し睨みながら言うと、彼は行き成り笑い始める…

「アハハハ！！！違う、違う。僕は純粹にキミの手伝いをしたいだけさ」

「どうして…？」

「どうして？…………キミは自分の姉に追い付きたくないのか？いや…言わなくても良い。追い付きたいから、キミは自分で専用機を作っているんだろ？姉と同じことをして追い付こうとしている」

「……………」

彼はまるで私の全てを知ってるように言う…でも、彼に私を手伝う理由が無い。

「理由がないって言う表情だな。理由は至極簡単だ。…僕は誰かが自分より上の存在を見る所を見てみたい」

そう言う彼の表情は哀しみに満ちていたが、すぐに元の表情に戻る…

「もう一度聞こう…キミは強くなりたいかい？」

さつきと同じ言葉…けれど、さつきとは違い。甘美な言葉…まるで、悪魔の囁きのような誘い…………

「よし、キミを強くしよう。これからよろしく。更識簪さん」

「…よろしく」

私は何時の間にか彼の誘いにのっていた…………あの甘美な言葉のせい？…違う…私は彼の哀しみに満ちていた表情に興味を持ったから…それに…

彼と一緒にいると楯無姉さんに追い付けそうな感じがしたからだ…

）side out）

）side 悠二）

俺は幸夜が整備室に言った後、自分の部屋に戻ってきた…

「しかし、俺達の部屋は結構ヤバいな…」

俺は自分の部屋の中にある私物を見て言う…

俺達の部屋は、俺と幸夜が持つ刀剣類と銃火器、それに幸夜が製作中の人形の一つ『サジタリウス』と幸夜が今まで作ってきた人形、幸夜が作った人形『歌姫』と『Jack-o'-Lantern』<sup>ディーヴァ</sup><sup>ジャック・オ・ランターン</sup>が入ったアタッシユケースだ…人形率多いな…

「ただいま」

「お帰り」

整備室から帰ってきた幸夜がそのまま製作中の人形の『射手座』<sup>サジタリウス</sup>に向かう。その顔はどこか嬉しそうだった。

「幸夜、どうした？そんなに嬉しそうな顔をして？」

「なに、この学園でも自分より上の存在を超えようとしている人間がいただけだ」

「あゝ納得…お前そういうの好きだもんな」

ハア…こいつの趣味はホント理解できないな。

『最つつつ低！女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！犬にかまれて死ねっ！』

…とりあえず、この隣から聞こえてきたは無視しよう

第拾話　セカンド幼馴染（後書き）

幽「紅　幸二のトークショーー!!」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショーー!司会は紅幽鹿と博麗  
幸夜と鳴海悠二でお送りします」

幸「悠二イイイイイイイー!!!!!!!!!!!!!!」

悠「幸夜アアアアアアアー!!!!!!!!!!!!!!」

ヒュン!ガキン!ドオオオン!!!!!!!!!!!!!!

幽「幸夜!悠二!お願いだからここで戦闘をしないで!!!!!!!!!!」

幸&悠「だが断る!!」

幽「何でそこだけ息合ってるの?!てか、如何して戦闘を行ってるの?!」

幸「そんなの決まってる!!」

悠「永林が霊夢か…」

幸&悠「どちらが可愛いかな勝負してんだよ!!」

幽「誰かヘルプウウウウウー!!!!!!!!!!!!!!」

幸「行くぞ悠二!!」

悠「こい幸夜!!」

幽「み、みなさん!!今日のトークショーはここまで!!さようならうって、二人とも宝具は使うなアアアアア!!!!!!」

第拾巻話々侵入者々（前書き）

誤字・脱字多いかもしれません

## 第壱拾壱話　侵入者

クラス対抗戦当日、僕は観客席の方にいた。

ピットの方にも行けるが、僕は正確に動きが見える観客席から見ることにした。

僕はアリーナの中央を見る。アリーナの中央には一夏は『白式』を付け、鈴が自分の専用機『甲龍』<sup>シェンロン</sup>を付けて闘ってる。

しかし、一回戦目で行き成り一夏と鈴か……あの二人……まあ、特に鈴の雰囲気が悪かったけど、一夏がなんか変なことでも言ったんだろっな……まあ、とりあえず

「簪、勉強になるかな？」

「…うん、幸夜」

僕は隣に立っている簪に聞く、ちなみに簪とは一緒にISを作っていくうちに名前を呼び合う仲になっていた。

「幸夜…私、そろそろISの作業を再開したいんだけど…整備室行かない？」

「ああ、良いよ。後は何をするんだっけ？」

「…飛行テストと武装の装備」

「そうか……僕があげた装備だけど…使える？」

「うん…とっても役に立つと思う…」

「そうか…それは良かった」

簪の言葉に心の底からよかったと思う。ちなみに僕があげた装備は、タクト君が持ってきてくれたISの装備のうちの一つ『白羊宮・アリエス』と何故かエターナルの中に入っていた設計図を見て創った『炎刀・銃』だ。

「それじゃあ、行こうか」

「…うん」

僕と簪は此処のアリーナから出る為に扉の方に向かうと…

「…あれ？扉が…閉じてる？」

「如何いうことだ？」

開いているはずの扉が開いていなかった…何故？

ズドオオオオン！！！！！！！！！！

「ッ?!」

「何だ?!」

突然の爆音に簪は体を震わせ、僕は音がした方を見る。



簪が珍しくも大声を上げて驚く……当然だ、僕が力任せに殴った扉が木っ端微塵になったからだ。

そして僕は一夏達の所に向かって跳躍し……

クリエイト・オン  
「創造開始」

僕は【創造と終焉を司る程度の能力】を使う……創るものは、攻撃から身を守る盾……

ロー・アイアス  
「熾天覆う七つの円環……！」

「「幸夜?!」」

僕は一夏達の前に達、二体分のビームを目の前に広がる七枚の花弁の盾で受け止める……クッ！三体目は無理か!?

アスレディスケ・アイギス  
「投影開始！（トレース・オン）万里俯瞰す蒼鏡の盾……！」

三体目のビームが放たれた瞬間、三体目と僕達の間立った悠二が投影した、鏡の盾……万里俯瞰す蒼鏡の盾で防ぎ、万里俯瞰す蒼鏡の盾の能力の一つである【反射】で、ビームを跳ね返し、アリーナに張ってある遮断シールドを破壊した。

「一夏……！」

「な、何だ、悠二?!」

悠二の声に一夏が答える。

「一夏、今このアリーナは封鎖されている！俺が言いたいことが分かるか？！」

悠二が言いたいこと…なるほど

「分かった。俺達が喰い止めるんだろ？」

「グット！」

一夏が力強く答えると、悠二が笑いながら言う。

「ちょ、ちょっとあんた達、何言ってるのよ！！此処は教師に任せなさいよ！」

悠二と一夏のやり取りを見て鈴が叫ぶように言う。

「言ったる鈴！今ここは封鎖されてるんだ！教師が来るのは時間がかかる。俺達が逃げたりしたらどうなる？！」

悠二の言葉に鈴がハツとする…そう…僕達が此処で逃げたら周りにいる生徒に被害が及ぶ

「一夏と鈴で一体、僕と悠二で一体ずつ…それでいいっ！」

僕の言葉に一夏と鈴が驚き、何かを言おうとするが…

「安心しろよ。一夏、鈴…」

「僕達は…」

「最強で最悪だからな!」

side out

side 悠二

「よつと」

俺は敵のIS-1体を引きつけ、さっきのビーム攻撃で穴が開いた場所からアリーナを出て、どんどんアリーナから離れていく…

「よし、此处で良いだろう…松岡SHU造!!」

「セットアップ」

俺はIS学園で【監視の目】がない場所に到着し、バリアジャケット

トと【マツオカフォーム】になったハーツを持ち、正眼で構える。

「ハーツ！」

「ライトニングアクセル」

俺は高速移動魔法の1つ、ライトニングアクセルを使い敵のISの背後を取りハーツで斬ろうとしたが…

「なっ?!」

「ダブルプロテクション」

敵のISは、人として曲がってはいけない所を曲げてビームを放ち、俺はハーツが咄嗟に発動してくれた<sup>ダブルプロテクション</sup>二重防御壁魔法で防ぐ

「ありがとう、ハーツ」

「いえいえ…しかし、あれは本当に人間なんですか？」

「如何いうことだ？」

「あの動き、完全にロボットの動きですよ。」

「その根拠は？」

「私の勘です！」

「クッ、お前の勘かよ…なら信じよう」

相手は無人機：なら本気を出せるってもんだ

「ハーツ！非殺傷設定解除！カートリッジロード！！」

「了解！カートリッジロード！！」

ハーツから三連続ロードされ、魔力が上がって行き刃が長くなり、その刀身に炎が纏わりつく

「一刀爆裂！！爆炎剛剣！！！！！！！！！！」

俺はそのままハーツを振り下ろし、敵ISを真つ二つにする。そして、切り口から炎が上がり…

ドカアアアアン！！！！！！！！！！

敵ISは爆発した。

…さて、幸夜にも敵が無人機だということを教えよう。

（side out）

｝side 幸夜｝

「（と、言うわけだから。敵は無人機だぜ）」

「（うん、ありがとう）」

悠二からの念話に答え、目の前のISを見る

ふうくん…無人機なんだ…

つまらない

人が中に乗ってるわけじゃないんだ。他の奴なら、良かったと思うかもしれない。でも僕は【殺人鬼】だ、人を殺すことは息をするのと同じだ。なのに目の前の敵は無人機？

僕はいつも制服の中に隠してある、小型犬…プライミッツ・マード  
ーを取り出し、地面に置く…

「**形成**」  
イェツライ

プライミッツ・マダー  
人類殺し」

Yetzirah | Primate murder

「ガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
!!  
!!  
!!  
!!  
!!」

プライミッツ・マーダーが雄叫びを上げながら強大化し、超巨大な狼に変わる

「では、零崎を開催しよう」

僕は目の前に敵がいるのを無視し、目を瞑って詠う……

「来たれ、来たれ、死よ、

Come away, come away, death,

そして哀しき糸杉の中に私を横たえておくれ。

And in sad cypress let me be  
laid ;

飛び逝け、飛び逝け、息よ、

Fly away , fly away , breath ;

私は美しくも非情な女に殺されたのだ。

I am slain by a fair cruel ma  
id .

白い布を、イチイで一面飾られたものを

My shroud of white , stuck all  
with yew ,

おお、用意しておくれ。

O prepare it ;

いまや死の世界の私、私ほど誠実に愛して

My part of death , no one so tr  
ue

死を分かつ者は誰ひとりいない。

Did share it .

創造—— 死を与える物の贈り物

Briah—— Hel gift

次の瞬間、プライミッツ・マードーが僕の体の中に溶けるように融

合し、僕の頭に犬耳が出現し、手と足も犬の足や手に変わり、僕は大きく跳躍し、犬の手に変わった手で敵ISを触ると…

「……死ね」

敵ISは霧のようなものになり消滅した。

## 第壱拾壱話　侵入者（後書き）

幽＆幸＆悠「……紅　幸二のトークショー……！」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と」

悠「鳴海悠二でお送りします！」

幸「それで作者、今回は何をするんだ？」

幽「今回はこの話に出てきた宝具『万里俯瞰す蒼鏡の盾』と聖遺物  
アスビティスケ・アイギス  
ブライミッツ・マードー  
『人類殺し』について説明するぜ！」

宝具：万里俯瞰す蒼鏡の盾  
アスビティスケ・アイギス

ランク：C

種別：対軍宝具

レンジ：2～30

最大捕捉：30人

ペルセウスが女神アテナより授かった、青銅の鏡盾が宝具になったもの。その鏡面は常にレンジ内の情報を映し出し、周囲に存在するモノの心音を伝えることでの死角を補う。他には鏡と言う

特性を生かし攻撃を跳ね返すことができる。

聖遺物：『フライミッツ・マダー人類殺し』

位階：創造

形態：特殊発現型 求道型

創造：「死を与える物の贈り物【死を平等に与えたい】ヘル・ギフトと言つ渴望の具現化

能力：犬の手足に変化した手が足で触れれば消滅させる能力。これは黒騎士の創造の能力とは違い、歴史に強制的に幕を引くのではなく、生物に【死】を与える。

ちなみにこの時の幸夜の姿は【ドラゴンクライシス】の【アイ】が人狼化した時の姿と一緒に毛の色は白

創造時の詠唱は【シェイク・スピアの『来たれ、死よ』】

「来たれ、来たれ、死よ、

C o m e   a w a y , c o m e   a w a y , d e a t h ,

そして哀しき系杉の中に私を横たえておくれ。

A n d   i n   s a d   c y p r e s s   l e t   m e   b e   l  
a i d ;

飛び逝け、飛び逝け、息よ、

Fly away, fly away, breath;

私は美しくも非情な女に殺されたのだ。

I am slain by a fair cruel maid.

白い布を、イチイで一面飾られたものを

My shroud of white, stuck all with yew,

おお、用意しておくれ。

O prepare it;

いまや死の世界の私、私ほど誠実に愛して

My part of death, none so true

死を分かつ者は誰ひとりいない。

Did share it.

創造——<sup>ブリア</sup>死を与える物の贈り物<sup>ヘル・ギフト</sup>

Briah——  
Hell gift

幸「です」

幽「創造後の姿は可愛いのに、能力は酷いな」

悠「さて！今日のトークショーはここまで！！」

幽「みなさん！」

幸 & 幽 & 悠 「 「 「 ちよつなう 「 「 「

第壱拾弐話、侵入者、その後（前書き）

今回、ネタ多目

キャラ崩壊激しいです。

## 第壱拾貳話　侵入者、その後

謎の敵ISを倒した後、僕と悠二が戻ると、一夏が保健室に運ばれていた。

どうやら、倒した思った敵のISの最後の悪足掻きのような攻撃を喰らったらしい。

「幸夜、俺は先に保健室の方に向かっとくけど…どうする?」

「僕はとりあえず電話をしておくよ」

「分かった」

悠二は僕が何処に電話をするのか分かったのか、頷き、保健室の方に行った。

さてと…

「もしもし?」

「もすもす? 終日?<sup>ひねもす</sup>」

「…………死ね」

「ちょ、ちょっと！いきなりその言葉は酷いよ、コウ君！」

「黙れ、篠ノ之…銅四十グラム、亜鉛二十五グラム、ニッケル十五グラム、照れ隠し五グラムに悪意九十七キロで、僕の暴言は錬成されているんだよ」

「ほとんど悪意じゃん！」

「ちなみに照れ隠しというのは嘘だ」

「一番抜けちゃいけない要素が抜けちゃった！」

僕は電話の相手…ISの生みの親である篠ノ之束に暴言を吐く

「さて、本気の言葉はここまでにして…」

「え、普通そこは、冗談はここまでにして…っていう流れじゃないの?!」

篠ノ之言葉は無視しよう…

「篠ノ之、単刀直入に言うが…今日ISを学園に送ったのはお前だろ?」

「……………」

電話から声が聞こえなくなり、辺りは静かになる…

「そんなわけないじゃんかゝ如何していつくんと箒ちゃんとかーちやん…それに、コウ君とユウ君がいる学校にISを送らないといけないんだよゝ」

「そうか…どうやら勘違いだったらしいな。すまん」

「別に良いよゝ私とコウ君の仲じゃないかゝブイブイゝ」

「そうだな…それと忠告だ…」

「何かな？」

「お前がこんなことしたら………零崎を開催するからな」

「ッ!？」

篠ノ之が驚いたような声が聞こえる…当然か…アイツには僕が…否、  
【零崎】が如何いう【一賊】か教えたからな…

零崎一賊…ある世界の『殺し名』序列3番目、『殺し名』の中で最も忌み嫌われる殺人鬼集団で、人を理由なく殺す【殺人鬼】

血の？がりではなく、流血で繋がっている一賊。一見バラバラに見えるけど結束は固く、家族である一人の零崎に仇をなしたら、零崎全員で、老若男女人間動物植物の区別なく皆殺しにする。

…零崎にとって【零崎を開始する】ことは人を殺す合図でもある。

そして、僕こと零崎紅識の二つ名は『オーバーキルパレード大量殺戮祭』………僕は零崎の中で最も【殺人欲求】を抑えられる【殺人鬼】…だけど、ひとた

びその殺人欲求を解放すれば、今まで抑え込んできた反動で沢山の人間を殺す。そして、殺した人間の知り合いも全員殺す………だから、僕が篠ノ之を殺したらその後には【篠ノ之の知り合い】を皆殺しにする。

「まあ、安心しなよ。つい先日、二人殺したからね。今は抑えられるからさ」

「そ、そうなんだ〜それで、コウ君の要件ってそれだけ？」

「いや、もう一つあるんだ」

「なにになに〜？」

「一夏の『白式』の武装を一つ加えていいか？」

「別に良いけど、その為の開きは無いでしょ？」

「なに、創れば良いさ」

「あ、コウ君の【創造と終焉を司る程度の能力】を使うんだ。あれって、チートだよな？………だって、その気になったら【真実】さえも終焉し、創っちゃうんだもん」

「僕もそう思うよ」

僕の【創造と終焉を司る程度の能力】は【真実】さえも変えることができる…もっと分かりやすくするな、人が死んだという【真実】を【終焉し】、人が生き続けると言う【真実】を【創る】ことが出来る。

「まあ、コウ君だし、別に良いよ〜」

「ありがと、それじゃあね。『人類天災』」

「うん、バイバイ。『人外最悪』」

僕は電話を切った。

さて、保健室に行きますか。

＼side out＼

＼side 一夏＼

「一夏、起きてるか？見舞いの品、持って来てやったぞ」

「起きてるぞ」

「あ、悠二」

俺が鈴と喋っていると、悠二がバナナを持ってやってきた…って、何故にバナナ？！

「む、今『何故にバナナ？！』って思っただろ？」

「何で悠二まで俺の心の中を読めるんだよ…！」

「俺、非常識の塊ですから」

「……………」

如何しよう…その言葉で納得している俺がいる…そして、空気になつてる鈴がいる

「一夏…！」

「ウェイ！ナンデズカリンサン」

俺の考えていることが鈴に分かってしまったのだろうか？俺は動揺を悟られないように平静さを保ち鈴の方を向く

「あんだ、喋り方が変よ？」

「ウソダンドコードン！」

鈴の言葉に俺は動揺する。クッ、さすが幼馴染…俺の動揺を簡単に見抜くか…

「いやいや、その喋り方だったら誰でも気づくだろ？」

鈴でも悠二でもない声…声が聞こえた方を見ると、幸夜がバナナを持って立っていた…って、またバナナ？！

「む、今『またバナナ?!』って思っただろ？」

「何で幸夜まで俺の心の中を読めるんだよ!!」

「僕、非常識の塊ですから」

「……………」

如何しよう…その言葉で納得している俺がいる…あれ？デジャヴ？

「さて、そんなことより…いちちか大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ…それと俺の名前は一夏だ。【ち】が一つ多いぞ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……………」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!?!」

「あんた達、何やってんのよ？」

俺と幸夜がこのようなやり取りをしていると、鈴が呆れたような表情で言う。

「別に…だけど、幸夜と悠二はさすがだな。無傷であの敵ISを倒したんだろ？」

「まあ…な」

俺の言葉に悠二は苦笑いに似た表情で言う…一体どうしたんだ？

「僕にとってあれは………つまらない相手だったよ」

この言葉を聞き、俺と鈴は幸夜の方を見ると…

「「ッ?!」」

夕日の光で幸夜が照らされ、幸夜の薄い金髪が光り輝いているように見える…まさに幻想的な美しさだ。………だけど俺と鈴が驚いたのはそこじゃない…幸夜の目だ…その目には光が無く、冷たさを感じる目…まるで、興味と言う物を無くしたような目だった………この目を見て俺は幸夜に【恐怖】した…

「なんてね」

次の瞬間、さっきのことは無かったかのように幸夜の眼は元に戻る。

「それより一夏」

「な、何だ、幸夜？」

「一夏の『白式』貸してくれないか？」

「へ、どうして?」

「一夏の『白式』、燃費悪いだろ?だから僕が少しだけでも調節してあげようと思ってね」

「そんなこと出来るのか?」

出来るなら、ありがたい。正直、どうやったら少しでも燃費を良くすればいいのか考えていた所だ。

「ああ、出来るぞ」

「なら、お願いできるか?」

「良いよ」

俺は『白式』の待機状態である白いガントレットを渡す。

「それじゃ、お元気で」

「バイバイ」

悠二、幸夜の順番で保健室から出て行った。

（side out）

｝side三人称

ここはIS学園の地下50m…そこにはレベル4の権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間…ここで先程の謎のISは解析されていた。

「織斑先生、あのISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です。」

世界中で開発されているISの分野において、まだ開発されていないとされている遠隔操作リモートコントロールが、独立稼働スタンドアローンの技術が、謎のISに使われていたことになる。その真実は、すぐさま学園関係者に箝口令が敷かれたほどだ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑君の最後の攻撃で機能中枢が焼き切れ、鳴海君の攻撃でコアごと焼き切られたので修復は不可能だと思います。それと、博麗君が言った『逃走した敵

IS』は現在も搜索中です」

「……………」

「織斑先生？」

麻耶が呼んでみるが千冬はディスプレイの映像を見続けていた。

〈Side out〉

〈side 幸夜〉

保健室を出た後、僕は整備室に行き、簪と一緒に簪の専用機を作っていた…

「簪…どうだ？」

「うん、大丈夫…後は実戦で動かすだけ」

簪の言葉に僕は頷く。

「そうか…なら後は簪のキャラ付けだな！」

「キャラ付け？」

僕の言葉に簪が首を傾げる。

「そう、キャラ付け。大抵、強い奴は決め台詞…まあ、口癖のようなものが付いてるだろ？」

「そう？…だけど私には必要ない」

簪は嫌そうな顔をする…む、なら奥の手だ…

「なあ、簪…仮面ライダーやスーパー戦隊…否！ヒーローは【決め台詞】があるだろ！？」

「……………！」

僕の言葉に簪の眼がキラキラ光る……………何を隠そう、簪はヒーローが大好きなのだ！！さてと、もう一度聞か…

「なあ、簪…口癖、欲しくないか？」

「欲しい…！」

普段の簪ではありえない程の声で言う…

ククク、計画通り（ニタァー）

## 第壱拾貳話、侵入者、その後（後書き）

幽&幸&悠「」「紅 幸二のトークショー!!」「」

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー! 司会は紅幽鹿と!」

幸「博麗幸夜と」

悠「鳴海悠二でお送りします!」

幽「仮面ライダーディケイド様、すみません! 後書きゲストは次回にしたいと思います。本当にすみません!!」

第卅拾参話、簪vsセシリア、（前書き）

今回も誤字・脱字があるかもしれません。

## 第拾参話　簪 vs セシリア

白い白いお家…

その白いお家の中は真っ赤になっている…

その真っ赤になっているお家の中で、頭にクマのぬいぐるみを乗せた幼い子供が、辺りが薄暗く少し見えないが【何か】を引きずっている。

そして、その【何か】を引きずる度に、幼い子供の歩いてきた道が真っ赤に染まる…

「ウウウウウ……………」

その幼い子供が引きずる【何か】から呻き声の様なものが聞こえ、幼い子供が部屋の中で一番明るく、まだ部屋が白い所に行くと【何か】の正体が分かる。

その【何か】とは……………血塗れになっている成人男性だ…

「助けて…助けて…」

成人男性からか細い声で助けをその幼い子供に願うが……………

「むう……うるさいなあ…」

幼い子供は自分の細い足で成人男性の頭を踏み潰し、成人男性の頭が潰れ、眼球が飛びだし、辺りに血と脳が飛び散る…



幼い子供は歌いながら塗っていると……

「うわゝ凄いなゝ流石の私も惹くわゝ」

声が聞こえ、幼い子供が後ろを振り向くと、姫カットと言う髪型にしている黒色の髪に黒い瞳、スタイルも出る所は出て、引き締まる所は引き締まっっていて、男性用のスーツを着ている女性が恍惚の笑みを浮かべながら立っていた…

「これ、キミがやったの？」

「そうだよ……誰？」

女性は恍惚の笑みを浮かべながら幼い子供に聞き、答えた幼い子供は首を傾げて女性の名前を聞く。

「私は『アンリミテッドテンネスト無限惨劇』名前はせうしき むおひ零崎無織。通りすがりの【殺人鬼】よ。貴方は？」

「僕？僕はやくも せうしき八雲幸夜」

「そう…幸夜？」

「何？」

「貴方、私の【家賊】にならない？」

女性…せうしき むおひ零崎無織が幸夜に向かって手を伸ばした…

~~~~~

「ハッ！」

僕は夢が覚めた瞬間、起き上がり、壁に掛けてある時計を見る…

「5時40分…」

あの夢は、僕と【師匠】が初めてであった時の夢………最近は見なくなっただけで言うのに………どうして？

まあ、だけど…

あの白い部屋を真っ赤にしたのは………

タノシカッタナ

「……………とりあえず、シャワーを浴びるか」

僕は隣のベットで寝ている悠二を起こさないように、物音を立てずにシャワーの方に向かった……………

~~~~~

今は放課後の時間…

僕と悠二は第三アリーナのピットに来ていた。

「簪さん、『打鉄式式』の調子は如何だ？」

「…大丈夫」

僕がモニターを見ると、アリーナには『ブルーティアーズ』を装着し、空に浮いているセシリアを見る。

「簪、準備は良いか？」

「うん…行ってくる」

『打鉄式式』を装着している簪も飛び、セシリアの待つアリーナに飛びだした。

……………どうしてこうなった？

くくく

今日の昼食の時間に、僕はきつねうどん、月見うどん、かき揚げの付いたうどんをそれぞれ五人分、簪と悠二はかき揚げの付いたうどんを頼んだ。ちなみに、簪と悠二は簪の専用機作りを手伝ってもらって結構仲が良くなっている。

そして席に着きうどんを食べようとしていると…

「む、幸夜。お前はやっぱり、ゆっくり半身浴派か…」

悠二が僕が一つのかき揚げを半分だけ汁に入れている所を見て言う。

「そう言う悠二はべちょ漬け派か…」

悠二はかき揚げの全部を汁の中に沈めている…

「ああ、そうだ。そして、簪もべちょ漬け派だ…これが如何言う意味に分かるか？」

クツ、僕の仲間はいないというわけか…

「悠二…それは違う…私はたっぷり全身浴派」

「なん…だと」

簪の言葉に悠二がショックを受けたような表情になる。

「くくかき揚げは」

僕達の声が重なり……………

「べちょ漬け派！」

「ゆつくり半身浴派！」

「たっぷり全身浴派！」

僕と悠二、簪の間で火花が散る…

そして僕は箸、悠二はフォーク、簪はナイフを持ち…構える。

そして【第一回、かき揚げ派閥対決】が行われようとした瞬間…

パンッ！

「いつ?!」

「パルデノン?!」

「ッ?!」

突然、頭にきた痛みで僕達は頭を押さえ蹲る…悠二が何処かの神殿の名前を言っているが…大丈夫か？

「貴様ら何をしている?」

声が出た方向を向くと、出席簿を持った織斑先生が立っていた。

「こんにちは。織斑先生」

「こんにちは。織斑先生」

「こんにちは。鬼斑先生」

パンツ！

「バロス?!」

上から順に、僕、簪、悠二だ…悠二大丈夫かな？今度は滅びの言葉を言っていたけど…

「それで貴様らは何をしていたんだ？」

「それは【第一回、かき揚げ派閥対決】で…て、危な?!」

「チッ」

僕が正直に答えようとすると、織斑先生が出席簿で叩こうとし、それを避けると織斑先生が舌打ちをする…舌打ち?!

「とりあえず、もう少し静かに食べ。わかったな？」

「「「サイエツサー」」」

織斑先生の鋭い眼光に僕と簪はピシッ！と敬礼をすると織斑先生は僕達に背中を向けて歩いていった。

「さて、食べますか」

「「「いただきます」「」」

そして、僕達がうどんを食べようとすると…

「キミ達って、噂の男子達？」

見知らぬ女子が話し掛けてきた…リボンの色から見て三年生だな…

「噂？」

「代表候補生と生徒会長に勝ったんでしょ？」

「「はあゝそうですが…」「」

「君達のIS稼働時間ってどのくらい？」

「僕は三十時間くらいですかね？」

「俺は五十時間かな？」

「そう…よかったら私がISのこと教えてあげようか？」

先輩の言葉に僕と悠二はアイコンタクトをして…

「「簪さんが教えてくれているので十分です」「」

「彼女のこと？同じ一年でしょ。一年のその娘よりも三年の私が教えた方が——」

「ちなみに彼女は日本の代表候補生なので、先輩よりも知ってることが多いんですよ」

「日本の代表候補生って……もしかして更識楯無の妹？」

「あつ……」

先輩の言葉に簪が体を少しだけ震わす。

「でもそれは【努力もしないで】姉のおかげでなっているようなものでしょ？」

ブチッ！

何かがキレル音がする……ふと、横を見ると悠二が小声で『この先輩、幸夜の【禁句】を……』って言っているが無視だ……

「いい加減にしたらどうです、先輩？」

「……………なんですって？」

「【私】の言ったことが聞こえなかったのですか？何も知らないで彼女のことを馬鹿にするなど言っているのですよ。先輩？」

「本当のことを言っただけでしょう?!」

「本当のことですか？貴方が言ったことは嘘です。彼女は彼女自身の力で代表候補生になったのです。貴方が言ってることは侮辱にすぎません」

「何ですって?!」

パンツ!

「ッ?!」

「急に何をするんですか? 織斑先生」

「何、騒がしいからな…それで何があった?」

「はい。それが…」

何時の間にか来ていた織斑先生が私と先輩に出席簿で叩きますが、私はそれを避け、先輩の頭には直撃します。そして私は織斑先生に事情を説明します。

「ふむ。確かに代表候補生と言う物は、自分の力なるものであり、他人の影響で慣れる物ではない。しかし…」

「しかし?」

「この言葉だけでは、お前らは納得しないだろう? なら、更識と他の代表候補生と戦わせて、更識が自分の力で代表候補生なったのか確かめれば良い。それで良いか?」

「私はそれで良いです」

先輩は大きく頷きます。

私は簪の方を向くと、簪は私が何を言いたいのか分かってくれたの

か、頷いてくれます。

「私も同意します」

その後、簪の相手がセシリア・オルコットに決まりました。

く  
く  
く

………はい、全部僕のせいでした…

あの後、僕は簪に対してジャンピング反転きりもみ回転土下座をして謝った。

それを見た簪は顔を引き攣らせていたが、すぐに許してくれた。

今度から、簪様って言おうかな？

｝side out｝

｝side 三人称｝

ここはアリーナ内…

アリーナ内では『ブルー・ティアーズ』を纏い、『スターライトmk?』の引き金を引きレーザーを発射しているセシリア・オルコットと『打鉄式』を纏い、超振動薙刀『夢現』を構えた状態で、セシリアのビームを避けている、更識簪が空に飛んでいた。

「最初から全力でいきますわよ!!」

「<sup>まけず</sup>不負、私は負ける訳にはいかない!」

セシリアは『スターライトmk?』の引き金を引き、レーザーが発射され、簪はそれを回避し、『夢現』の射程距離までセシリアに近づき、薙刀を右、左、下、上と振っていくが、

「『インターセプター』!!」

『スターライトmk?』を『収納』し、近接武器を『展開』したセ

シリアは、簪の攻撃を『インターセプター』で流すことによって避ける。

「きゃっ！」

そして、瞬時に『インターセプター』を『収納』し、『スターライトmk?』を『展開』し、簪に向かってレーザーを放ち、簪に直撃する。

「これで終わりですよー！」

セシリアの指示で四つのビット型の武器である『ブルー・ティアーズ』が簪の周りを囲み、簪に向かってレーザーが発射される。

「『白羊宮：アリエス』！」

『ブルー・ティアーズ』の一斉射撃は、簪が『展開』した牡羊を模した盾：『白羊宮：アリエス』によって全て防がれる。

「あの攻撃で決着をつけるつもりでしたが…さすがですね」

「ハア…ハア…」

「私と貴方のシールドエネルギーの差は圧倒的に私の方が大きいですわ。貴方はよく頑張りましたわ。降参しませんか？」

セシリアは『スターライトmk?』を構え、簪の周りに『ブルー・ティアーズ』で囲んだまま聞く。

簪は自分のシールドエネルギーを確認した後…

「不<sup>うなず</sup>領…私は降参はしない…」

簪は『白羊宮：アリエス』を『収納』する。

「不<sup>うなず</sup>裏切…此処で降参したら、私を信じて、自分の実力を認めさせる機会を作ってくれた人を裏切ることになる…私は、私を信じてくれた人の心を裏切りたくない!!」

普段の簪では出さないような声で、簪は叫ぶ。

「そうです…それではお別れですわ!!」

セシリアが『ブルー・ティアーズ』に指示を送り、簪を攻撃しようとした瞬間…

バン！バン！バン！バン！

「な、何ですか?!」

四回ほどの発砲音が聞こえた瞬間、セシリアの四基の『ブルー・ティアーズ』が破壊された。

そして、セシリアが簪を見ると、簪の手には装飾が施されている回転式連発拳銃と自動式連発拳銃が握られていた。

「これは、『炎刀・銃』…さっそくだけど、これを使わせてもらおう！」

「ッ?!<sup>イグニッション・ブースト</sup>瞬時加速?!」

イグニッション・ブースト  
簪は瞬時加速で、セシリアに近づき……

「『炎刀・銃』 限定奥義：断罪炎刀！……！！……！！」

セシリアに接近した簪が持つ『炎刀・銃』の銃口に火が灯り、至近距離の連続した攻撃を行う

「キヤアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

簪の断罪炎刀<sup>だんざいえんとう</sup>によって、セシリアのシールドエネルギーは削られていき、ISの装甲も少しだけだが、壊れていく。

そして…

「試合終了。勝者、更識簪」

アナウンスが流れ、簪とセシリアの試合は終了した。

## 第拾参話　簪vsセシリア（後書き）

幽&幸&悠「「紅　幸二のトークショー！！」」

幽「始まりました。紅　幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と」

悠「鳴海悠二でお送りします！」

幽「それじゃあ、幸夜！！」

幸「了解！今回は【息抜きカオス雑談！】から風見大介君とその作者、仮面ライダーディケイド様が来てくださいました！！」

大&ディ「こんにちはわ」

幸&悠&幽「「こんにちはわ」」

幸「それで、作者今回は何をするんだ？」

幽「じつを言うと…考えてない…」

悠&ディ&幸&大「「はい？」」

幽「すみませんでした！！！！！！」↑全力の土下座

悠&幸&大「「ハア」」

デイ「さ、三人とも一体どうしてそんな危ない物を持っているんですか？」

大「作者は少し黙ってる！」

デイ「プゲツ?!」

幸「それで、作者…言い残すことはある？」

幽「…や、優しくしてね♪」

悠&幸&大「…だが断る!」

幽「ギヤアアアアアア!?!?!?!?!」

幸「ごめんね、大介君。うちの作者が…」

大「別にいいさ」

悠「二人ともどうやら時間のようだぜ」

幸「それじゃあ、大介君達にエレキスイッチとファイヤースイッチをプレゼント!」

悠「それでは、みなさん」

幸&悠&大「…さようなら」



第壱拾四話〜墮天使〜（前書き）

今回は急展開です。

もしかしたら御都合主義かもしれません。

それでは、第壱拾四話…どうぞ！

## 第壱拾四話　墮天使

グチャ…グチャ…

誰にも気づかれない裏路地で、咀嚼音が鳴り響く…

その咀嚼音が聞こえた所には、黒い翼が生えていて、肌が鉛色で、体のあちこちに返り血がついている墮天使がいた…

「アイエス……………ガクエン……………ハカイ…」

墮天使は途切れ途切れに言うと、足元に落ちている死体を骨まで食べると墮天使は闇に融けるように消えた…

それから暫くして…

「クツ、遅かったか…」

「ああ…」

スーサイドルファンゲ  
手に地裂灰燼を持ち白いスーツを着た悠二と、両手に【デザートイ  
ーグル50AE】と【S&WM19】を持ち黒いコートの様なもの  
を着た幸夜が裏路地に付着していた血と辺りに散らばっている肉を  
見て呟くように言う…

「マスター……………悠二…」

「お気持ちは分かりますが、後始末を…」

エンド・イクウェップ  
「終焉武装」

トレース・オン  
「投影開始…火葬式典」

幸夜と悠二は血と肉を終焉<sup>こゝろ</sup>、辺りを燃やし始めた

Side out

Side 一夏

「今日、博麗と鳴海は如何しても外せない用事があり、今日は休むそうだ。では、授業を始める」

俺は千冬姉の言葉を聞き、幸夜と悠二の席を見る…

…今日は幸夜が言っていたISの装備で素振り100回でもやるか。

ちなみに、俺は幸夜と悠二に訓練を付けて貰っている。俺が三週間

くらい粘り続けた結果だ。

この時、箒やセシリア、鈴に睨まれたが…三人とも幸夜達が説得してくれたおかげで、俺一人vs三人と言う構図は無くなった。

それで、俺は訓練を付けてもらっていたが……まさか、幸夜があのなることになるなんて…

悠二曰く、幸夜は【努力を馬鹿にする奴】や【相手に訓練をする時は幸夜と同じ容姿をした『腹ぺこ王一号』と同じ性格になるそうだ………『腹ぺこ王』って誰だ？

ここで今までの幸夜の言葉を思い出そう…

『イチカ、どうしてこんなことが出来ないのです？私だって出来ますよ！』

『イチカ！如何してそうなんですか！！ここはこうでしょう！！！！』

『イチカ、お腹が空きました…』

うん、幸夜の性格が変わってるな。しかも背後にはガオ——っ  
て言ってるようなライオンも見えたしな…

だけど、力も付いてきたことも確かだ…俺は幸夜から『白式』の装備に『獅子宮：レオ』を貰った。この時、どうして、『白式』に新しい装備が？と思ったが、幸夜と悠二だからと納得してしまった…

そして、【獅子奮迅<sup>ししぶんじん</sup>】と言う技も教えてもらった…まだ、練習中だ

けどな。

「織斑この問題を解いてみる」

「は、はい！」

色々考えているうちに授業が進んでいたらしい、色々考えていた俺が答えられるわけもなく…

「わ、わかりません」

パンツ！

出席簿で叩かれた音が鳴り響いた…

〃  
〃  
〃

今は放課後、俺はアリーナで『白式』を装着し、獅子を模した大剣…『獅子宮：レオ』を構える。

そして、俺の目の前には『打鉄式』を装着し、『炎刀・銃』を持った簪さんと、その後ろや横には箒やセシリア、鈴が立っている。

「行くぞ、簪さん」

「…うん」

俺は瞬間加速を発動して、イグニッション・ブースト簪さんに接近していく。

「獅子奮迅ししふんじん！……！！！」

獅子奮迅…相手に急接近し、その勢いで大剣を振り、圧倒的な破壊力で相手を斬り伏せる技…

俺は簪さんに大剣を振るうが…

「駄目…」

バン！

「ガッ！」

簪さんの『炎刀・銃』で俺は攻撃され、大剣の軌道を逸らしてしまい簪さんに避けられる。

「いててて…」

「…大丈夫、一夏？」

「おう、大丈夫だ」

俺は簪さんの手を借りて立ち上がる。

ちなみに、俺と簪さんは最初は仲が良くなかった…その理由が、俺の『白式』の開発の為に、簪さんの『打鉄式』の開発が遅れたからだ…今、こうして仲良くなれているのは幸夜と悠二のお陰だな。

「それで箒、セシリア、鈴、何処が間違ってたのか教えてくれ」

俺は箒達に聞くが…

「む…分からないわ」

「正直言って分かりませんわ…箒さんはどうですか?」

「私もだ。正直言って、幸夜の【獅子奮迅】と一夏の【獅子奮迅】は同じように見えるが…」

箒達の意見を聞いて俺も悩む…箒達の視点で見れば、俺と幸夜の【獅子奮迅】は一緒なんだな?

「簪さんはどうだった?」

「…速さが足りない」

簪さんの言葉に俺はやっぱりと思う…

「やっぱりか…どれくらい足りないんだ?」

「ほとんど…幸夜の場合、剣が見えなくなる…一夏は丸見え…」

ぐわっ、そこまでか…やっぱり暫くの間は素振りかな?



侵入者は奇声を上げながら突撃してくる

「セシリア!!」

「ええ、分かってますわ!!」

セシリアが四基のブルー・ティアーズでビームを鈴が『衝撃砲』で侵入者を攻撃するが…

「ウオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!」

「「なっ?!」」

セシリア達の攻撃が直撃したはずの侵入者の勢いが止まることなく俺たちに近づいてくる…

そして……

ブオン!バン!バン!

「HEEEYYYYY!!」

突然やってきた、銀と黒の二色でカラーリングされているバイクが侵入者に体当たりし、そのバイクの後ろに乗っていた人物が二つの銃で、侵入者に向かって発砲し、銃弾が当たった侵入者が苦しみ始める…その様子を見ながらバイクに乗る人物達がヘルメットを取ると…

「幸夜に…悠二?」

バイクに乗っていた漆黒のコートの様なものを纏った幸夜と、白いスーツを着た悠二だった…

｝side out｝

｝side 三人称｝

「一夏達、大丈夫？」

「あ、ああ」

一夏は幸夜の言葉に頷く…頷いた一夏を見て、幸夜は堕天使の方を見る。

「一夏達は下がって、こいつは僕と悠二が倒すから…」

「な、何言ってたんだ幸夜?!」

「幸夜さん、貴方はあの侵入者のことを知っているのですか？あの侵入者はISの武器でさえ傷付かなかったのですのよ?!どうやって倒すっていうのかしら？もう暫くしたら救援が来る筈ですわ」

幸夜の言葉に一夏が驚き、セシリアが慌てながら言う…





幸夜の呼びかけに、先程の墮天使の悲惨な状態や肉体が再生した所を見てしまった一夏達は思いっきり文句を言う。

そんな一夏達を幸夜は無視をして、墮天使の方を見る。

「幸夜！」

悠二は地裂灰燼を墮天使の体から抜き取り、後ろに飛び距離を取る。

スーサイドアルファング

「それでは劇の幕開けといったそう……」

「……薔薇の花弁？」

幸夜の足元に魔法陣の様なものが出現し、一夏達の頭上から薔薇の花弁が次々と落ちてくる。そして、幸夜は【劇場】の幕開けを知らせる為の言葉を言う……

「我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！ インペリウムの誉れをここに！ 咲き誇る花のごとく……開け！ 黄金の劇場よ……！」

次の瞬間、辺り一面に薔薇の花弁が舞い、一夏達の視界を無くし、薔薇の吹雪が止むと……

「……な、何なんだこれは？」

先程までアリーナだった場所は、【黄金】で彩られた【劇場】に変わり、一夏達は驚く。

幸夜が使ったのは、宝具【招き蕩う黄金劇場】……これは、ネロ・ク

フェストゥス・ドムス・アウレア



そして…

「さて・・・幸夜さん、悠二さん・・・説明してくださいね？」

良い笑顔をするセシリア…

「…はい」

こうして、幸夜と悠二は皆にどういつ風に説明をしようかと考えながら学園の中に入って行った…

## 第拾四話（墮天使）（後書き）

幽&幸&悠「「紅 幸二のトークショー！！」」」

幽「始まりました。紅 幸二のトークショー！司会は紅幽鹿と！」

幸「博麗幸夜と」

悠「鳴海悠二でお送りします！」

幸「それで作者、今回は何をするんだ？」

幽「今回はこの話に出てきた宝具『招き蕩う黄金劇場』アエストゥス・ドムス・アウレアについて説明するぜ！！」

宝具：招き蕩う黄金劇場アエストゥス・ドムス・アウレア

自己の願望を達成させる絶対皇帝圏。生前、ネロ・クラウディウスが自ら設計し、ローマに建設した劇場【ドムス・アウレア】を、魔力によって再現したもの。固有結界とは似て非なる大魔術。聴衆に自らの公演を強制的に最後まで聞かせるべく、劇場の出入り口を全て封鎖し閉じ込めたというエピソードに由来し、展開されている間、閉じ込められた敵は弱体化する。

幽「です！」

幸「それにしても、今回は急展開だったな」

悠「そうだな…一体どうなる事やら…」

幽「さて！今日のトークショーはここまで……！」

悠「みなさん！」

幸&幽&悠「」「」「おやすみなさー」「」「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2785y/>

---

IS(インフィニット・ストラトス)～魔神がいく物語～

2011年12月21日17時53分発行